
ニナコズ・ストーリー

ネコ = モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二ナコズ・ストーリー

【Nコード】

N2312K

【作者名】

ネコモドキ

【あらすじ】

悪の組織、ロケット団の解散から三年後。
平和に暮らす人々。

ワカバタウンに住んでいる少女、若月二ナコは、隣に住んでいる、ウツギ博士のお使いとしてポケモンじいさんの所に行くのだが、成り行きで旅に出る事に！？

gdgd作者が描く、gdgd気味なポケモンストーリー。主に自己満足ww

はじめに

テストが終わったー！！

そして帰ってきたー（涙）

そして買ってもらったー！！

念願のハートゴールド！！

ちよー嬉しいよおおお！！

でも、時代遅れな自分。今更ながら、ポケモンのハートゴールドを買ってもらった、（・ ・）ノイエイツ！！

だって、我慢してきたもの。良いじゃないか！！

さて、実は3月8日の今日！！始めました。

嬉しいッスー！！

嬉しさのあまり、もう泣きそう…（涙）

何はともあれ、分かりにくいでしょうが、頑張って読んで下さい。

では（＾・＾）ノ

はじめに(後書き)

これから、よろしく願いします(^^人^^)
あと、感想受け付けます!!

『お使い』という名の序章 1 (前書き)

さてと、投稿完了〜。

>ピピキ<

早っ!!--!

でしょ〜 (>O>)

コツコツ書きしていたのだ!

>ピピキ<

じゃあ何で『ムリ!』だったのさ?

何となく、長くなる気がして。そして気づいた。
分けちゃえばイーじゃん!!
っつて。

>ピピキ<

そーゆー事が……。そりゃ、早いよな。

とまあそーゆー事。

本文をどうぞー!

『お使い』という名の序章 1

私の名前はニナコ。ワカバタウンに住んでいるの。

「ニナコ！降りてらっしゃい！」

「はい」

一階からお母さんに呼ばれた。

だから、一階に降りた。

「やっと降りてきた。さつき、お隣のウツギ博士がここに来たんだけど。何でも、ニナコに頼みたいことがあるらしいんだけど……」

行ってきたら？」

「うん、分かったよ。お母さん」

「忘れ物はない？ニナコ」

「うん。大丈夫。それじゃ、行ってくるね」

「行ってらっしゃい。気を付けるのよ、ニナコ」

「はい」

私は、お隣のウツギポケモン研究所に行った。

やっぱり近い。

「ん？」

誰かいる。何でわざわざ窓から中を覗いているんだろ？

ちよっと尋ねてみよ。

「あの………」

「……誰だ」

その人は、少年だった。真っ赤な髪の毛という、変わった少年。

「誰って言われても………」

困る。

「……まあいい。お前には関係のないことだ。邪魔をしないでくれ」
その少年はそう言っつて、私を押し出した。

何か荒い人だなあ。

「ま、いつか」

私は、そんな事をひとまず置いて、研究所に入った。

「こんにちは」。ウツギ博士」

「あ、待っていたよ。ニナコちゃん!!」

「それで、頼みたいことつて何ですか？」

「ああ、それはね……。さっき、僕の知り合いのポケモンじいさんからメールが来たんだけど、『今度こそ、本物の新種のタマゴですぞ!』つてメールが来たんだ。調べに行きたいのは山々なんだけど、僕も助手も忙しくつてね。手が離せないんだよ」

「なんなら、ヒビキに行かせれば良いじゃないですか」

「ヒビキくんもヒビキくん忙しいみたいなんだ」

ヒビキ、めんどくさがりおつたな……。

「多分嘘ですよ。無理にでも、私が連れて行きますから」

「そうかい？ありがとう。よろしく頼んだよ」

「はい」

私が、研究所を出ようとしたとき、ウツギ博士が呼び止めた。

「ちよつと待つて。ニナコちゃん。ポケモンじいさんの家知つているのかい？」

「あつ……………（汗）忘れてました」

「そうだろ？行き方を教えるから、よく聞くんだよ。ポケモンじいさんの家は、ヨシノシティを少し北に行ったところにあるから。あと、ポケモンをニナコちゃんに持たせよう。あそこの装置があるじゃないか」

「はい」

「あの装置に、貴重な三体のポケモンが入ったモンスターボールが置いてあるから、どれか1つ選んで連れて行ってくれ」

「あ、はい」

私は装置の方に行った。

「誰がいい？一番手前は、ワニノコ。右側にあるのが、ヒノアラシ。で、左側にあるのが、チコリータだ」

「じゃあ……………。この子にします！」

「おお、決めるのが早いね。じゃあ残りは、明日旅立つ人たち用だな。その子はあげるよ」

「ほ、本当ですか！？ありがとうございます！！よし、じゃあ出てきて、ワニノコー！！」

「ワニヤ〜！！」

「性別は……………。あ、だ！かつこいい〜。名前は……………どうしようかな。ん〜……………。まだ決めなくていいや」

「ワニヤ〜」

アレツ？何かワニノコのテンション下がってない？

「それじゃ、今度こそ頼んだよ」

「はい」

そうして、私は研究所から出ようとした。

「二ナコさん」

「はい？」

ウツギ博士の助手さんに呼び止められた。

「何ですか？」

「これをあげます。まだ、ポケモンは弱いですから、危ないと思ったら、使つて下さい」

「わあ、傷薬！しかも五個も。ありがとうございます、助手さん」

「いえいえ。忙しくて行かれない私とウツギ博士の代わりに行って

くれるんですから、構いませんよ」

「ありがとうございます。それじゃ、ヒビキを誘って行ってきます」

「ありがとうございます」

「いえ。それでは」

私は研究所から出た。ワニノコを連れて。

「気持ちいい？ワニノコ」

「ワニヤ〜」

嬉しそうに返事する、ワニノコ。

「ヒビキン家行こっか。ワニノコ」

「ワニヤ〜？」

ヒビキが分からないようだ。

そりゃあ、そうだ（汗）

私とワニノコは、ヒビキン家の前に来た。

「こんにちは〜」

「こんにちは、ニナコちゃん。ヒビキなら、二階でマリルと遊んでいるよ」

ヒビキのお父さんが言った。

「ありがとうございます」

「ニナコちゃんは礼儀正しくて羨ましいよ。……………おっ…ニナコちゃんもやっとなポケモンが貰えたか！〜」

「はい、ワニノコって言っんです。結構強そうですよ」

「ワニノコか〜。強くなるんだろうな〜」

「それじゃあ、ヒビキンとこに行ってください」

「ヒビキー！〜」

「うわぁ！？な、何！？ニナコ！〜！〜」

「行くよ！〜！〜」

「は？」

「ほら、マリルも」

「リル？」

私は何が何だか分かっていない2人（正確的には、1人と一匹）の手を掴んで、下に降りて、外に出た。

その時に、

「……………ヒビキが引つ張られてる……………」

とか何とかヒビキのお父さんが言っていた。

「何何何何だ！？二ナコ！？」

「リルル〜！？」

「あ、ゴメン」

「何気に29番道路に入っちゃってるし……………」

「アハハ〜夢中になって走ってた（笑）」

「（笑）じゃないと思うんだけど……………」

「ほら、あと少しで、ヨシノシティだよ！ヒビキ！！」

「というより、何で俺まで？」

「良いじゃないの あ、ヨシノシティに着い……………」

と、ヨシノシティに入ろうとしたとき、

「お前さん達、新米トレーナーか？凶星じゃろ？まあ誰だって初め
てはあるもんじゃ。さ、わしに付いてこい！！」

「た？」

え！？早っ！！何者よ、あのおじいさん！！

……………あれ？何か戻ってきた。

「すまんすまん。つい癖での。今度はゆっくり歩くから、付いてこいよっ。」

「は、はあ……」

そう言っておじいさんは、近くの建物に歩いて行った。しかし、それは『歩いて』とは言えない速さだった。

走ってるじゃん!!

ってか、充分速いつての!

そんな事を思っている私たちをほっといて、おじいさんは、説明を始めた。

「ここはポケモンセンターじゃ。ポケモンを預けると、あつという間に元気になるんじゃ!あと、宿泊施設、喫茶店等があるぞい。これから世話になるだろうから、しっかり覚えておくんじゃぞ」

「は、はい」

私達が返事をする、おじいさんは、また走って、隣の建物に行った。

「ここはフレンドリィショップじゃ。ボール、傷薬、道具等を買つとるんじゃ!」

「はあ」

そう言っておじいさんはまた走って行った。

「ここから先は30番道路じゃ。ほんぐりおじさんや、ポケモンじいさんの家がある」

おじいさんは今度は返事を待たずに走っていった。

やっぱり速い……!!

今度は、海に来た。

何故に海?

「見ての通り、海じゃ。しかし、海の中にもたくさんポケモンが居

るんじゃない！それを忘れるなよ！」

そいおじいさんが説明し終わったと同時に、また返事を待たずに走っていった。

「ここは……わしの家じゃ。お前さん達には、お礼をしよう。脱ぎたてホヤホヤのランニングシューズじゃ。……」

「冗談じゃよ。」

お前さん達には、ちゃんと新品をやるぞい」

そうして、私とヒビキは、ランニングシューズをゲットした。

それにしても、おじいさん冗談きついよ……（……）

おじいさんは私達にランニングシューズを渡したあと、家に入ってしまった。

「そういえば、あのじいさん何者だ？」

「さあ？ちよっとポスト見てみるよ。……」

【案内じいさんの家】だって。ヒビキ……。あれ？居ないんだけど……」

「マリル待て〜！」

「リルリルル〜」

ヒビキは、いつの間にか、マリルと追いかけてっこをしていた。

ちよっと！？私の存在を消さないで！？

『お使い』という名の序章 1 (後書き)

>ヒビキ<

なあ、作者。

ん？

>ヒビキ<

赤髪の少年って誰だよ。

うーんとね……… 次回の次回分かるよ。

>ヒビキ<

待つ時間長っ！

ゲームがそうだから。ほとんどゲームにそってやってる (つもり)。
でも、HGは、もうヒワダまで行ったんだけど、事件を解決した
あと、ウバメの森でレベル上げしようとしたら、ライバルくんが来て、
そして、そいつのベイリーフに殺られた…… (ー|ー;) 全部。

>ヒビキ<

I see .

何で英語で答える？

>ヒビキ<

英語使えたら、カッコいいと思わないか？

思わない。

>ヒビキ<

酷いなあ……作者。

毒舌ですもの(笑)

>ヒビキ<

俺は改めて作者が恐ろしいと思った(´・`・´)

次回も見て下さい!!

あと、感想待ってまーす!!

『お使用』という名の序章 2 (前書き)

>ヒビキ<

やっと投稿か……。

サーセンm () m

>ヒビキ<

何で投稿が遅れたんだ？

2週間後に投稿しろって言った筈だ。

だって、神戸いんべじゃ執筆する暇がなかったんだもん。

>ヒビキ<

まあ、しょうがない。

今回の場合は、旅行だったから、許してやる。

だが、次回は許さんぞ。ツカサに来てもらって、リアモンやってもらうからな。

覚悟しとけよ。

へい。サーセンm () m

次回から頑張りますm () m

『お使い』という名の序章

2

「ヒビキ!!行くよ!もう!!」

「あー、ゴメンゴメン」

私とヒビキはポケモンセンターで休んでから、& a m p ;案内じいさんからマップをポケギアに入れてもらって、30番道路に出た。

ザザザッ

私とヒビキは、草むらの中を歩いて行く。

ワニノコも、マリルもちゃんと頑張っけて付いてきているようだ。

可愛いなあ（笑）

「何笑ってるんだ?」

「ん、別に」

むにっ

は?むに?

「オタチー!（痛いー!）」

「わ!オタチ!」

「戦うよ!ヒビキ!」

「はあ?」

「レベルを上げるため!」

「へいへい」

「ワニノコ!引っ掻く!」

「ワニヤ！」

ザクッ

うわ、何かグロい。

でも、相手のオタチには結構ダメージがいったみたい。

「オタツ」

オタチも、引っ掻く攻撃をしてきた。

「ワニノコ！避けて引っ掻くー！！」

「ワニヤ！」

ワニノコは、オタチの引っ掻く攻撃を避けて、背後から、引っ掻くをした。

「オタチ」

オタチが倒れた。ここは、ボールを投げて捕まえたいところだが、肝心のボールがない。

「やったな」

「まあね」

そんな会話をしながら歩いていると、草むらから出ていたのに気付いた。

道が開けた。

今気づいた。ヒビキ、戦ってないじゃん。

「あそこか？ポケモンじいさんの家は」

「違うよ、ヒビキ。ぼんぐりおじさんの家だよ。ほら、すぐ近くにぼんぐりの木があるでしょ？」

「確かに」

「ちよつと入ってみよ？何か貰えるかも」

「その考えはどこからくるんだ（；；；）」

「頭ん中（、・）」

「……………（――・）」
で、入ってみる事にした。

カチャ

「こんにちは」

「……………ポケモンじいさんの家と間違える人が多いけど、君は違った！君にこれをあげよう！あ、そっちの君にも」

「ありがとうございます！！」

「何で俺はついでのような扱いなんだ？
と、いう顔をヒビキはしていた。

私とヒビキは、ぼんぐり入れを貰った。

「目指せ！ぼんぐラー！」

ぼんぐりおじさんは拳を天井に突き出して言った。

「おー！」

私は参戦。

「……………（――・）」

ヒビキは呆れた顔で、私とおじさんを見ていた。

* * *

ん？あんなところに、バトルをしている男の子達が……………。

「行け！コラッタ！体当たりだ！……………、何だよ。今バトルの最中なんだ、邪魔しないでくれ！」

そう男の子に言われたので、立ち去る事に。

「ポケモンじいさんの家は……………、』この先まっすぐー！」

「何だよ、今の『この先まっすぐ!』は」

「だって看板に書いてあるもん」

「そんなことは……マジだ(´・`・´)」

「ま、取り敢えず行こうよ」

「だな」

私とヒビキは、会話をしながら歩いていた。その会話は……。

「ねえヒビキ」

「ん?」

「あのさ、赤髪の少年って見たことある?」

「赤髪の少年? うん……… あ、そう言えば、研究所の窓から、中を覗いていたのをチラって見たぜ」

「そうなんだよね。何してんだろ……?」

「というもの。」

「ん? あれか? ポケモンじいさんの家って」

「そうなんじゃない?」

「行こうぜ!」

「了解」

ガチャ

「こんにちは。ウツギ博士のお使いで、来ました。ニナコとヒビキです」

「お! 待っていたよ。ニナコちゃんとヒビキくんだね。ウツギ博士にメールを送ったのは、僕だよ。ニナコちゃん、君にこれを渡そう。はい」

私は何かしらのタマゴを受け取った。

「ジョウトじゃ見たことないだろう。このタマゴ」

「そうですね」

「ってか何で俺じゃないんだ?」

「君は何か危なっかしそうだからね(笑)」

「いやいや、そこは笑うところじゃ……………」

「やあやあ、こんにちは諸君」

「え？」

そこへ現れたのは、なんと有名な、オーキド博士だったのだ。

「わしはカントー地方のオーキド・ユキナリじゃ」

「やつぱりー！」

「あの、有名なポケモン川柳のオーキド博士！？」

ヒビキ、反応するとこ違うんだけど……………。

「まあ、そうとも言われておるな。……………どれ、ちょっとポケモンを見せてごらん」

オーキド博士が屈んで、私のワニノコを見た。

「ワニヤ？」

ワニノコは何が何だか分からないようだ。

それもそうだよね……………（＾o＾）；

「ほほう……………。なかなかよく育てられておるようじゃな。牙の輝きも良い。いたって健康体じゃな」

「ワニヤ〜」

ワニノコは、オーキド博士に撫でてもらって嬉しそうだ。

オーキド博士は立ち上がり、ヒビキのマリルを見始めた。

「リル？」

やつぱりマリルも分かっていないようだ。

「ほほう……………。君のマリルもよく育てられておるようじゃの」

「リル〜」

マリルもオーキド博士に撫でてもらって嬉しそうだ。

「さて、君たちにはわしからこれをあげよう」

オーキド博士は、私達に何かを手渡した。

「ポケモン図鑑じゃ」

「あ、ありがとうございます!!」

「ポケモンを見たり、捕まえたりすると登録されるんじゃ。まだ何にも登録されていない、この未完成のポケモン図鑑を完成させてくれ! それでは、わしはコガネシティのラジオ収録があるから失礼させてもらっよ」

そう言つて、オーキド博士は、ポケモンじいさんの家を出ていった。

「それじゃあ、ウツギ博士に頼んだよ、そのタマゴ」

「はい」

「了解」

私達はポケモンじいさんの家を後にした。

『お使い』という名の序章 2 (後書き)

>トビキ<

時間掛けてこれだけか……。

サーセンm(——)m

>トビキ<

つてか、ゲームはエンジュシティに行ったのに、何で俺らはまだお使いの途中なんだよ!!

ギャー……!!サーセン!!

>トビキ<

待て……!!作者……!!

ギャー……!!止めね……!!トビキトビキギャー……!!

『お使い』という名の序章

3 く事件の予感！？？（前書き）

> ビビキ <

早いうちに投稿か……。珍しい事もあるもんなんだな。

ま、貯めて書いてるし。

何かもう面倒くさくなったから、本文へどうぞ！

『お使い』という名の序章 3 〈事件の予感!?!〉

「それにしてもビックリしたね。だってオーキド博士が居たんだもの」

「だよな。あの有名なポケモン川柳のオーキド博士だもんな!」

ヒビキ、やっぱりそこずれてる……。

「ヒビキ、オーキド博士はこの世界で一番有名なポケモン博士なんだよ?」

「え!?!ポケモン川柳じゃなかったのか!?!」

やっぱり分かってなかった(――)。

ピリリリッ ピリリリッ

「ん?ニナコ、ポケギア鳴ってるぞ?」

「え?あ、本当だ。……もしもし。……あ、ウツギ博士。どうしたんですか?」

「《ニナコちゃん、大変なんだよ!今すぐこっちに戻って来て!事情は後で話すよ!》」

プツッ プープープーツ

「なんだろ……」

「内容は、何て?」

「『今すぐこっちに戻って来て!』だって。ウツギ博士、何か切羽詰まっていた。

「私ちよつと嫌な予感がするんだよね……」

「何か俺もそう思った。嫌な予感がする……」

「取り敢えず急ごう！」

「了解だ！」

私達はフタバタウンに向かって走っていった。

ランキングシューズを履いているから、結構速く走れる。

ヨシノシティに着いて、ポケセンでポケモンを回復させたあと、私達は急いでヨシノシティを後にしようとした。

「おい」

「え？」

背後……からではなく、真つ正面からあの赤髪の少年が現れた。

「お前……！！研究所の外に居た、赤髪野郎じゃないか！」

「フンツ。何の事を言っている。まあいい。その女。俺と勝負しろ」

「え？わ、私！？」

「お前も、研究所でポケモン貰っただろ？なら尚更。盗んできたこのポケモンで勝負しろ」

「ぬ、盗んできただと？」

「その女、バトルだ」

「ええー！？」

そして、いつの間にかバトルが始まってしまったワケで……。

『お使い』という名の序章

3 〱事件の予感!??〱 (後書き)

>トビキ<

.....。

短いだろ？

>トビキ<

短過ぎてちよっと俺悲しい。

でしょ？私もちよっと衝撃を受けた。

「うお!?!短!?!」

とか思ったよ。

>トビキ<

夜中に投稿っていうのはどうかと思っぜ、作者。

(話変えたな、コイツ。)

ま、近々次話を投稿しようと思いまーす(^o^)
それでは(^ ^)ノ

『お使い』という名の序章 4 〽初バトル！〽 (前書き)

>ニナコ<

例の赤髪の少年とバトルするんですね！

絶対にボコってきます！

頑張れ！ニナコ！！めっためたにしてこい！

>ニナコ<

了解です！

行ってきます！

『お使い』という名の序章 4 初バトル！

「行け。チコリータ」

「チッコ！」

「チコリータ！あなた、チコリータを盗んだのね！」

「フンッ。そんな事はどうでもいい。早くポケモンを出せ」

「うー……（私にとって不利なポケモンを盗んできたのね……）。
いいや。行け！ワニノコ！」

「ワニヤワニヤ」

「ワニノコ、引っ掻く！！」

「チコリータ、避けて体当たり」

「チッコ！！」

「ワニヤ！？」

ワニノコの攻撃は避けられ、背後からのチコリータの体当たりに当たった。

「ならば……。ワニノコ！！睨み付ける！！」

「ワニヤッ」

「チ、チッコ……」

チコリータは怯えているようだ。

「チコリータ、何を怯えている。体当たり」

「チ、チッコ！」

「ワニノコ、避けて引っ掻く！！」

「ワニヤ！！」

「チコ！？」

ワニノコの引っ掻くがチコリータに当たる。

「俺も参戦するぜ！」

「お前は違う、マリル野郎」

「んだと〜！！」

「チコリータ、葉っぱカッター」

「あゝ！無視すんなー!!」

「ヒビキ、マジで邪魔だから！本当、マジでー!!」

「ニナコまで!?!」

「ワニノコ、避けて引っ掻くー!!」

「ワニヤー!!」

「避けて攻撃ばかりじゃ、意味は無いんじゃないか？」

「うー……」

「ワニヤー!!」

「チコ!?」

「チコリータ、体当たり」

「チッコ!」

「ワニノコ!!引っ掻くで迎え撃て!!」

私がそう言った後、赤髪の少年はニヤツと、笑った。

「チコリータ、葉っぱカッター」

「!?!……取り敢えずワニノコ!!引っ掻くで迎え撃て!!」

「ワ、ワニヤー!!」

ワニノコは一瞬戸惑ったが、すぐに指示に従ってくれた。

葉っぱカッターは、ワニノコの引っ掻くでパラパラと落ちた。

「ワニノコ!!すぐさま水鉄砲!」

「ワニヤー!!」

ワニノコの水鉄砲がチコリータを襲う。

「相性の悪い水タイプの攻撃を仕掛けるとは。お前は馬鹿か？」

赤髪の少年は鼻で笑った。

思いつきり嫌み言ってる……。

何かムカつく……。

勝負が終わった後、殴ってやろうか。

「それはどうだろうね？ワニノコ!!水鉄砲を引っ掻きながら、チコリータに体当たり!&引っ掻く攻撃!!」

「ワニヤー!!!」

「フンツ。チコリータ、避ける」

「チコ…」

「どうした。チコリータ。あんな技が怖いとでもいうのか？」

「分かっただいね。チコリータの体力はもう限界ギリギリ。これを喰らえば、瀕死状態で勝負あり。ワニノコ!!!突撃じゃー!!!」

ニナコのキャラが壊れた!!!（ララ〜るう）

「ワニヤー!!!」

そして、ワニノコのスペシャルアタック（今つけた）はチコリータに命中。戦闘不能で、勝負あり。

「私の勝ち!!!」

「フンツ。役立たずなヤツだ」

赤髪の少年は、戦闘不能になった、チコリータを戻しながら言った。

『お使い』という名の序章 4 〽初バトル!〜〽(後書き)

よし、よくやった、ニナコ!!

次回、ニナコが、アイツをやります!!

では!

あ、あと、感想お待ちしております(皿皿)

『お使い』という名の序章 5 く勝ちましたーく(前書き)

このあと、赤髪の少年の名前が明らかに!!
そして!

ニナコ、赤髪の少年をボコる。
ヒビキ、バトル中にマリルと遊ぶ。
赤髪の少年、スられる。

の三本です。(思いつきりサ さんの次回予告)

注意!

名前が出てても、投票する対象にはなりませんので、ご了承ください。

キャラクター人気投票は終了いたしました。投票して下さった方、
どうもありがとうございます。

これからも『ニナコス・ストーリー』をよろしく願いますm)

——) m

『お使い』という名の序章 5 〱勝ちました！〱

「俺に勝てて嬉しいか？そこのおん……」

ガツッ

赤髪の少年が全部言い終わらないうちに、鈍い音が聞こえた。

「……二、二ナコ……！？」

私は赤髪の少年にアツパーを喰らわせた。

これ結構強力w

「な、何する！！女！」

「仕返し。嫌みを言った仕返し」

「俺がいつ嫌みを言った？」

「（何か開き直ってる……。馬鹿な奴。）バトル中」

「フンツ。まあ、いい。ほらよ」

赤髪の少年は私に500円を手渡して通り過ぎて行った。

「（チツ、これっぽっちか……。ん？）」

その時、あるものを見つけたから、素早く、気付かれないように赤髪の少年のポケットから、取った。

トレーナーカードだ。

「（名前、アキラ……。これしか書いてないな。つまらん）」

私はバッグの中に赤髪の少年のトレーナーカードをしまおうとした。すると、少年は急に立ち止まり、何かを探し始めた。

トレーナーカード探してんだ……。

「！」

こちらに気付くと、私に向かつて来た。

「何かご用？」

「ああ。俺のトレーナーカード返せ！」

そう言つて、赤髪の少年こと、アキラがトレーナーカードを私から取り上げた。

と思つたが大間違い。代わりに、（私の）偽造トレーナーカードを取り上げさせた。

取り敢えず、用は無くなつたし、後は走つて逃げるのみ！バレなきゃ良いのさ！

「それじゃ、こっちは急な用事があるからこれで失礼させてもらいまーす。ヒビキ！！走るよ！！つてか行くよ！！」

「了解！！」

ダーツ

と、私達は走つて行つた。

「ヒビキ！！スピードアップするよ！！」

「は！？俺、これが限界！！」

「しょうがない！落ちないでね！ヒビキ！！」

ダーツ

と私はヒビキの襟を掴んでほぼ全力で、研究所を目指して走つて行った。

『お使い』という名の序章 5 〽勝ちましたー〽(後書き)

ニナコ頑張った!!

>ニナコ<

作者さん、取り敢えずトレーナーカードを……。

>アキラ<

俺のトレーナーカードを返せ。

あ、出てきたw

>ニナコ<

嫌だ。

ニナコが嫌がってるじゃないか諦めろ、アキラ。

>アキラ<

五月蠅い。作者は黙っている。

ふーん。そんな口聞いて良いと思ってるの？
アルセウス！裁きの磔つばね！

>アキラ<
があ!?

今の聞いた?「があ!?!」だって。アヒルみたいw
よし、今度から>アヒル<にしよう。

>ヒビキ<
それは賛成だ!

>二ナコ<
私もです!

よし、んじゃきつまりー!

>アヒル<
勝手に決めるな!あと、俺の名前を返せ!

おー、おー、取り乱してるね〜。
お前はそんなキャラじゃないんだけどね〜。
では(^ o ^) /

『お使い』終了！　く何か疑われた！く（前書き）

>ニナコ<

やっとお使い終わりましたか……。

うん（；）

これから旅立たせるところを執筆してんの。

>ニナコ<

早く執筆して下さい。

そうですね……、1週間で……。

ムリ。

>ニナコ<

何で即答なんですか！！

ムリ無理ムリ無理ムリ無理ムリ無理ムリ無理。

>ニナコ<

何でカタカナと漢字の交互で無理って言うんですか！！

嫌ー。もー言わないでー。(棒読み)

>ニナコ<

.....。

『お使い』終了！　く何か疑われた！く

で、数秒後

「ただいま戻りました！ウツギ博士！」

研究所に入り、私とヒビキは小走りして、ウツギ博士の元へ行った。

「あれ？どうしたんですか？ウツギ博士」

何かウツギ博士おろおろしてる……。しかも警察官も居るし……。

「実は、外から変な音がしたものだから、助手と外に出てみたんだ。でも、何も無くて、また研究所に戻ったら、ポケモンが一体居なくなっていて……」

「それって……。チコリータですか？」

「そう！そうなんだよ！って、何でニナコちゃん知ってるの？」

「それは……」

説明しようとしたところで、警察官のおじちゃんに遮られた。

「ん？何だね、君は……。……私の経験から言つと、『？　犯人は現場へ戻って来る。』ということは、君たちが犯人？」

警察官が言った。

いきなり疑われたー！！

「違いますよ」

ヒビキがサラリと否定する。

「そうですよ。研究所の外の窓から、赤髪の少年が覗いてましたよ。私、その人と話しましたし、バトルもしました」

「ふむ……。なるほどな」

「あと、証拠品として、はい」

取り敢えず、おじちゃんにはトレーナーカードを渡さないで、見せるだけにしよ。

「こ、これは……!？」

「赤髪の少年のトレーナーカードです。証拠品なので、見せるだけですよ」

私はそう言っつて、警察官のおじちゃんに見せた。

「ほほう！名前は……、アキラ……か。君には感謝しよう。『赤髪の少年、アキラを追い。』なるほど。警察署長に伝えておこう。犯人と疑っつて悪かつたね。それでは、失礼するよ」

そう言っつてアキラくんのトレーナーカードを見終わつた、警察官のおじちゃんは、研究所から出ていっつた。

「何かいきなり犯人つて、疑われたな」

「だね（ ; ; ）」

私はアキラくんのトレーナーカードをカバンにしまいながら、言っつた。

「ところで、ニナコちゃん。何で盗まれたポケモンが、チコリータだつて分かつたんだい？」

「言つたじゃないですか。赤髪の少年、アキラくんと戦つたんですよ。チコリータと、ワニノコで。あからさまにワニノコと相性悪いの選んで、盗んできましたよね（ ; ; ）それに、自分で『盗んだポケモン』つて言つてましたからね。ヒビキも聞いてたでしょ？」

「あ？ごめん。そんな時マリルと遊んでた（ ; ; ）」

「ふざけてんの？」

「べ、別に……」

「そ、ならいいや。ところで、ウツギ博士。『大変な事』つてもしかして、さっきの盗まれたチコリータの事だつたんですか？」

「うん。そうなんだよ。どんな目的で盗みを働いたのかは分からないけどね。」

ところでニナコちゃん。例のタマゴ、預かってきたかい？」

「あ、はい。ちゃんとバッグの中にあります。はい」

私は、ウツギ博士に、ポケモンおじさんから預かった、『不思議なタマゴ』を渡した。

「うーん……。確かにジヨウトじゃ見かけないタマゴだけど……。

まあ、取り敢えず調べてみよう。ありがとう、ニナコちゃん、ヒビキくん。家に帰って休憩すると良いよ」

「はい、分かりました。それでは失礼します。ヒビキ、行くよ」

「へーい」

* * *

「ただいま〜」

「あら、お帰り、ニナコ。あら、ニナコはワニノコを買ったのね」

「うん。疲れた〜」

「何かあったの？ワニノコも少し疲れてるみたいね。座りなさい。

元気ができるもの作ってあげるから」

「ヤッターー!!!」

「ワニヤ?」

「あのね、ワニノコ。私のお母さんの手料理はスツゴク美味しいの!だから、ワニノコもきつと気に入るよ!」

「ワニヤ〜!!!」

ワニノコは喜んだ。ジャンプしながら足をバタバタして。

* * *

「しゅちそうさま〜」

展開早！（ララ〜るう）

「どう？満足した？ニナコ、ワニノコ」

「うん！美味しかったよ！オムライス！」

オムライスかい！（ララ〜るう）

ちょっと作者さん、いちいち突っ込まないで下さい（怒）

サーセンm）——（m）ララ〜るう）

「ワニノコも満足した？」

お母さんがワニノコに問う。

「ワニヤワニヤ〜」

ワニノコは満足そうに言った。

「良かった。口に合ってくれて」

お母さんは、ワニノコを撫でながら言った。

「ワニヤ〜」

どうやらワニノコは撫でてもらう事が好きなようだ。

そういえば、オーキド博士の時もだったな〜。

「よし、ワニノコ。私の部屋に行こっか」

「ワニヤ？」

「まあ来れば分かるって」

「ワニヤ！」

そしてワニノコを連れて、私の部屋に行った。

「ワニヤワニヤ〜！」

ワニノコは部屋に上がってくるなり、目を輝かせて、走り回り始め

た。

「ワニヤワニヤ！ワニヤワニヤ！ワニヤワニヤ！ワニヤワニヤ〜！」

「ワニノコ〜！走り回らないで〜！（> <・;）」

「ワ、ワニヤ!?!」

私の注意（？）を聞いた瞬間、ワニノコは硬直。

「ワニヤ〜」

「そ、そんなに気を落とさなくても……（^ ^ ;）」

ピンポーン

ピンポーン

「ん？誰だろ？」

1日の終わり（前書き）

>ニナロ<

やっと終わるんですね。1日が。

うん。長かった（；´、´）

1日の終わり

「ニナコー！幼馴染みのヒビキくんが来たわよー！」
お母さんが一階から私を呼んだ。

「ヒビキか……。何の用かな……」

私はワニノコを連れて、下へ降りた。

「やっと降りて来たな、ニナコ」

「ご用件は？」

「何でため息混じりで、面倒くさそうに言っただよ」

「だって本当に面倒くさいもん。もうちょっとワニノコと遊んでいたかった」

「しゃーねーだろう？ウツギ博士に頼まれたんだ。ニナコと、一緒に研究所に来て」

「もう。でも、ウツギ博士が呼んでるし、しょうがないよね〜」
（；）

そついう事で私達はお隣のウツギ研究所に行った。

何だろう……？

* * *

「こんにちは、ウツギ博士」

「やあ、ニナコちゃん！待っていたよ！」

「どうしたんですか？」

「ニナコちゃん、ヒビキくん、ポケモンを連れ歩いてどう思ったかい？」

「へ？」
「は？」

ウツギ博士の唐突な質問に開いた口が塞がらない状態……………。

「え？ワニノコの気持ち分かる気がするんですけど……………」

「俺はいつも連れてるけど、そりやまあ楽しかったですよ」

「うーん……………。2人の感想は『楽しかった』か……………。うーん……………」

「よし！二ナコちゃん、ヒビクくん旅に出てみないかい？」

「は？」

「へ？」

またもやウツギ博士の唐突な提案に少々啞然とする、私とヒビキ。

「何でいきなり……………？」

「旅に出る事でポケモンの事が何か分かると思うんだ。ポケモンは未知の生き物だからね。分からなかった事が解明されたりとか。勿論それだけじゃない。この世界にはまだまだたくさんポケモンが居るんだ。その他の地方にもポケモンは居るんだ。そのポケモンたちも見てきて欲しいんだ。まあ要するに僕の研究の手伝いをして欲しいんだ」

「なるほど……………」

「あ、終わりました？」

「つてヒビキ。何してんの？」

「お茶、啜すすってんの」

「今の話聞いてた？」

「うん。長くなりそうだったから、お茶啜すすってた」

「じゃあ要旨を言っただららん？」

「いいぜ。ポケモンの生態を知る事、その他の地方のポケモンを見てくる事。まあ要するにウツギ博士の研究の手伝いをするんだろ」

「ちゃんと話聞いてたんだ……………（ヒビキにしては意外……………）」

「そうなんだよ。で、旅に出てくれるかい？」

「勿論」

「二ナコちゃんはどうするかい？」

「私は……………」

どうしようかな……………。

「私は……………」

「行くか？」

「旅に出るかい？」

「旅に出ます!!！」

「そうかい！」

「他の地方のポケモンも見てみたいし」

「それじゃ旅に必要な道具は僕のとこで用意しておくよ。明日、研究所において」

「はい」

「分かりました」

「君達のお父さんお母さんに知らせておくよ。それじゃまた明日」

「はい」

「それでは」

私とヒビキはウツギ研究所を後にした。

外に出てみれば辺りは夕焼けに染まっていた。

これで私の長かった1日が終わる。

そして、明日から私の旅が始まるつとじている……………。

1日の終わり（後書き）

特に無し！

>ニナロ<

身勝手過ぎます）∴、（、

旅立ち（前書き）

やっと投稿出来たよ〜〜！

>ニナコ<

遅いですよ!!!

>ヒビキ<

散々やっておいて何なんだよ、お前は!?

黙れよヒビキ?

これがアタシなんだよ。本性だ（笑）

>ヒビキ<

俺は更に改めて作者が恐ろしいと思った。

旅立ち

翌日

「ニナコーー！！幼馴染み&お友達のヒビキくんが来たわよー！！」

「おばさん、そこまで言わなくても……」

「んん……くー、くー」

「ワニヤワニヤー！！」

ワニノコが私を揺すぶる。

「んん……もうちょっと寝かせて……くー、くー、くー……」

「ワニノコでも起きないか……」

ヒビキの声がした。

いつの間にか？

「しょうがない。マリル！ワニノコ！ニナコの顔に水鉄砲！！」

は……？

ブシャアアアアッ

マジでしやがった！！

私は慌てて飛び上がる。

「水鉄砲止め！」

ヒビキの指示で水鉄砲が止んだ。

「何すんのよ！？」

私の顔や、髪から雫が落ちる。

ベッドが濡れちゃったよ……………。

「二ナコ、やっと起きたか」

「何してくれたの？」

「二ナコが起きないから起こしてやったんだ」

「お母さんに『お漏らししたの？』って聞かれるからもうやらないでって言ったじゃない。それに今回はワニノコまで加わっちゃって……………。今まで以上に威力が強かった……………」

「ゴメンm（――）mタオル持って来るから、ちょっと待ってる」

「うん。ありがとう、ヒビキ」

ヒビキはそう言って下へ降りて行った。

2分後

「ほい」

バサバサ

「後で、仕返ししてあげるから楽しみにしておいてね、ヒビキ（笑）」

「……………嫌」

「拒否っても無駄だよ？強制的にするんだから（笑）」

「今のうちに逃げる！！」

「出でっけてくれてありがとう。今から着替えるところだったんだ」

数分後

私は下へ降りた。ワニノコも勿論居る。

だってパートナーだし

「ニナコ、外でヒビキくんが待ってるわ。早くご飯食べて、身支度しなさい」

「うん、分かった」

更に数分後

「お待たせ」

「結構早かったな。……………5分30秒」

「計ってたの(; ;)?」

「まあな」

「ニナコー!!ポケギア忘れてるわよ!!」

お母さんがドアを開けて言った。

「あ、ホントだ」

「まったく。そこを直しなさいっていつも言ってるじゃないの!誰に似たのかしらね?」

「うっ……………」

「お前の父さんだろ」

「……………」

不完全燃焼……………(; ;)

「お隣さんだけど、行ってらっしゃい。気をつけていくのよ、旅何かあったら電話するからね」
「はい」

何か複雑な感じかも……。

「（しょうがないよね……、お父さんに似て忘れんぼなんだもん。）
そ、それじゃ行ってきます……」
「よし、スッゲー近いが、行くか。二ナコ」
「うん」

* * *

「こんにちは、ウツギ博士」
「こんにちは」

私とヒビキは小走りでウツギ博士の元へ行つた。

「あ！来たね。二ナコちゃん、ヒビキくん。必要な道具は用意していたよ」

博士の机の上には、真新しいポストンバックと名前の分からないバッグが置いてあった。
すると、

「うおおおおお！こ、これは今流行りのショルダーバッグでねーか！！」

と隣で叫ぶ、ヒビキ。

「うっさいわよ」

私はヒビキの耳を摘まむ。

「いだだだ！？」

「ってか、ショルダーバッグって、女の人がよく肩に掛けるバッ

グじゃないの？」

「この形のヤツもショルダーバッグって、言うんだ」
「へえ〜。ヒビキにしては、よく知ってるね」

『ヒビキにしては』は、強調

「何だよ！ー！悪いかよ！？」

「う〜ん。ちよっと」

「……………」

あれ？あまりのシヨックに言葉を失っちゃった？

そりゃドンマイだね（笑）

「このバッグの中に必要な道具が入ってるからね。ニナコちゃんのバッグはこれ。ヒビキくんのバッグはこれだよ。後で中身を見ておくんだよ」

ウツギ博士は私にポストンバックを、ヒビキにショルダーバッグを渡した。

それと同時にヒビキのテンションが上がった。

「ショルダーバッグ、ゲットだぜ！」

思いつきりアニメのサシの台詞…………。

この後ピカチュウが『ピッ、ピカチュウー！』って言う筈だけど、居ないからしょうがない。（by作者）

「ありがとうございます、ウツギ博士。……………あ、そっだ。ポケモン図鑑を……………」

私は昨日、オーキド博士から貰ったポケモン図鑑をポケットから取り出した。

「そ、それは！？」

ウツギ博士が目を丸くして言った。

「昨日オーキド博士から貰ったポケモン図鑑です。何か、図鑑を完成してほしいって言われました」

「凄いよ！流石はオーキド博士だ！僕もニナコちゃんがただ者ではないとは思っていたけど、まさかそれを見破るとは……………」

「……………」

どうゆう事？

「あ。それは気にしないで(汗)」

気になるから隠さないでよ、ウツギ博士

「おいニナコ、途中から思ってる事が漏れてるぞ」

「ん？そう？」

私が思ってる事、何で漏れちゃったんだ？

「まあ取り敢えずオーキド博士に図鑑を完成させてくれてって言われたんだし、これから旅に出るんだし、いい機会じゃないか。どうせならチャンピオンに挑戦してみるかい？」

「チャ、チャンピオン!？」

「いや、出来たらの話だよ、ヒビキくん」

ウツギ博士が訂正を入れる。

「無理に返事を出さなくてもいいよ(笑)それに、チャンピオンに挑戦する前に各地のジムリーダーを倒さないかね」

「取り敢えず、ここで中身を確認」

ヒビキ、何で床に座るの？汚らしい……………。

「取り敢えず、私も中身の確認つと」

バッグの中には、傷薬5個、モンスターボール10個、穴抜けの紐5個だった。

「何か種類少くないですか？」

「まあね。旅の途中で色々拾ったりすると思うから、余裕をもってバッグの中身を空けておこうと思ってね」

「なるほど」

「それじゃあ」(ヒビキ)

「行きますか」(ニナコ)

私とヒビキはバッグの中身の確認の後、外に出た。

外

「……………お母さん」

「何？ニナコ」

「こつちが聞きたい。何その格好」

「娘が旅に出るんですもの、ちょっとはオシャレしたいじゃない？」

「それってチヨットって言えるの？」

お母さんは、何故だか知らない、袴を着て、お父さんとのツーショット写真が入った額縁がくぶちを手に持っていた。

「いいじゃない。青春時代に浸りひたたかったのよ」

「あと、何でお父さんの写真を持つてるの？お父さんまだ死んでないよ？今シンオウ地方に単身赴任してんのに」

「何となく悲しい感じを出そうと思って。てへ」

「『てへ』じゃなくて……………」

「父さん」

「何だい？」

「普通だな」

「わ、悪かったなあ！」

「ま、しょうがないよな。やっぱりこの服のセンスの無さじゃあ、母さんも出ていきたくなくなるよな(笑)」

「ヒビキン家、大変だねwお母さん、実家に帰っちゃったし」

「二、二ナコちゃんまで……………!」

「ま、おかげさまで料理が上手くなっただけだな(*^_^)(bでも、問題は父さんだ。父さん、料理下手だからなあ……………」

「じゃあ、私達が旅に出ている間は、私のお母さんが世話するっていうのはどう?」

「二、二ナコちゃん!何がなんでもそれは……………」
「良いわよっ(*^_^)(b……………つて、えゝゝ!?)」

ヒビキのお父さんキャラ崩壊w (by作者)

「じゃあ、お母さん。ヒビキのお父さんのお世話をよろしくね」

「分かったわっ(*^_^)(b」

「魔性の女達……………(ボソッ)」

ヒビキが何か言った気がするケドあえて気にしない

「よし、じゃあ行こっ、ヒビキ!」

「おう!」

「行ってらっしゃい、二ナコ。気を付けて行くのよ?ヒビキくんもよっ」

「はい」

「二ナコちゃん、ヒビキをとことん鍛えてやってくれ」

「ハイッ!」

こうして私とヒビキはワカバタウンを後にした。

旅立ち（後書き）

結構長く書いたよ……（汗）

二十コ達は居ないね……。

記念すべき10話目は長くないとね（笑）

これからも頑張って執筆したいと思います！
ではでは！！

何回目かのヨシノシティ（前書き）

いやー。最近HGやってないから地名とか忘れかけてるよ、私w）
笑）

取り敢えず、遅い更新ですが、どうぞ！

何度目かのヨシノシティ

29 番道路

「で、何処まで一緒に行動する?」
ヒビキに聞いた。

「『で、』って何だよ、『で、』って。まあ取り敢えず、今から別れよう」

「……………」

今からって……………(;)

「じゃ、俺、先行くよ。じゃあまたな、二ナコ」
そう言ってヒビキはマリルを連れて走り出した。

……………あ、マリルが転けた。

ん?あ、キヤタピーに襲われてやんのw(笑)

……………え?ちよ、ちよ、何で?何で引き返してくんの!?
ええい、しょうがない!!

「Help meイイイイ!!」

ヒビキが叫んで来る。

「ワニノコ、最大威力で水鉄砲!!」

「はあ!?!」

ブシャアアアアアッ

「ぎあ〜ぶっ!〜!」

「キヤタ!?!」

キヤタピーの目の前にヒビキのお尻!

の前にキヤタピーは逃げていった。(by作者)
そして

ドシンッ

ヒビキはお尻から落ちていった結果がこれだった。

「……いったあああああああ!!」

「クスクス。尻餅付いてやんの(黒笑い)にしても良かった。キヤタピーが逃げれて」

「ホツとするのはそこかああああああ!!ちつとは俺の心配でむしろよ!!」

「うっさい。誰がアンタの心配するかバーカ(笑)」

「酷え(……)……ってか何かケツ填はまったし!抜けねえ!!」

「本当に馬鹿ね(笑)(笑)じゃ、私、先行くから」

「ああ。じゃあな。ここでレベルアップしてからお前に追い付くぜ!!」

「あー、はいはい。ってか追い付かなくていい。ってかそれじゃ無理に等しいよね(笑)」

「……………(泣)(泣)(泣)」

「あ、いじけた(笑)じゃ、行こっか。ワニノコ」

「ワニヤあ!!」

* * *

私とワニノコは3回目のヨシノシティに着いた。
行く途中で倒したポケモン、約10匹。

その内の2匹（オオタチとポツポ）を捕まえた。

ワニノコのレベルが今、Lv.12。

結構上がったw

「さてと、ワニノコ。ポケモンセンターに行こっか」

「ワニヤワニヤー!!」

私とワニノコは、ポケモンセンターに入った。

「あ、ジョーイさん」

「あら、どうしたんですか？」

「傷を治しに来ました」

「ワニノコとオオタチとポツポね。ちょっと預かるわ」

「はい」

私はワニノコ達を預けている間、喫茶店に行くことにした。

喫茶店

「ふう……………」

私はお茶（冷たいの）を飲みながら、溜め息を突いた。

「いろいろと疲れたな……………。ん？」

あれは……………。

何回目かのヨシノシティ（後書き）

次回！

多分早くなる！……………かな。自信はない。

>ニナコ<

確信してください。

ごめん。無理だよ。

>ニナコ<

作者さん……………？

あうっ（汗）

じ、次回は、newキャラが出てきます。

とある人物との再会？（前書き）

新キャラ、でます！

最年少で……うん、あれだよ、あれ。

あれの意味が知りたい方は、本文へLet's Go!

何か悟ってしまった！と思った方は、引き返してもよいです。

とある人物との再会？

「ミズキ……………だよな、あの姿」

あの168センチ（ぐらい）ある長身で、その身長に合った体型をした男の姿があった。ラフな格好をしており、ハンチング帽を浅く被っていた。

彼の名前は丹隅にすみ 水樹ミズキ。彼は、私の従兄いとこ（ ）で、しかも、歳は2つ違う。ホウエン地方に住んでいる筈なんだけど……………。
「何でここに居るんだろ……………」

ん？

「あ」

どうやら向こうは私に気づいたようだ。

「ニナコー！」

ミズキが私のところに足早にやって来た。

「ミズキ、何してんの？ ホウエン地方にいるんじゃないかったわけ？」

「あー、うん。でもホウエン地方飽きたから、カントーに行ったんだ。 あー、ここ座っていい？」
ミズキが私に許可を求める。

「ん？ ああ、いいよ。ホウエン地方が飽きたって……………（；；、）とところで、カントーって何処？」

「あれ？ 知らなかったの？ 隣の地方だよ。ワカバタウンからカントー地方に行く最短ルートだから、序でに来てみたんだ」
ミズキが座りながら（帽子を取って）言った。

「ホウエン地方、何で飽きたの？」

「いやー、チャンピオンの仕事も楽じゃないな〜って思ってさ。長期休みを取らせてもらって、代わりにダイゴさん（元チャンピオ

ン)にやってもらってるよ(笑)」「

元チャンピオンって言わないで。悲しくなるよう〜 (byダイゴ)

「ちゃんと仕事しないと〜」

「あはは。僕には似合わない仕事だよ」

ミズキはちよつと苦笑して言った。

「まあ確かにおっとりしてるし、のほほんとしてるし……………」

「でしょ？ でも、カントー地方とジヨウト地方を制覇したら、

ホウエンに帰って、チャンピオンの仕事をきちんとやる予定だよ。

と言うより、やるけどね(笑)」「

「ジヨウト地方制覇かあ……………。よし、じゃあ、ミズキは先にジヨウト地方制覇しても良いよ」

「何その『じゃあ、』って。しかも上から目線なわけ!?!」

「もちろん ミズキがジヨウト地方制覇したら、私が後からジヨウト地方制覇してやるんだからっ。私が、新チャンピオンになるんだもん!」

「おお〜!」

「とは言っても今の時点じゃあ、夢のまた夢だよ(^^;)」

「取り敢えず、頑張つて。僕は応援してるよ。二ナコなら、きっと素晴らしいチャンピオンになれると思うから」

「……………ありがとう。私、頑張るね!」

ピリリッ ピリリッ

「あ、ヒビキだ。……………もしもし?」

《もしもし二ナコか?》

「そうでなきゃ誰が電話に出るのね」

《まあ、そうなんだが……………(^^;)、ところで、頼み事がある》

「何?」

《尻^{ケツ}がはまって動けねえから、ん……》（何て言おうとしたかは、ご想像にお任せします。）
「嫌」

《速攻かよ!? つてかまだ全部言い終わってねえし!》
「だってめんどくさいんだもん」

「二ナコ、ヒビキくんの頼みを聞いてあげたら」

ミズキ、顔が若干ひきつってるよ）（；）

《そのおひとりとした声はミズキ兄さん!》

「聞こえるんだ。初耳」（二ナコ）

《じゃあ、ミズキ兄さん、来て!》

「うん。分かった。何処?」

《29番道路》

「うん。分かった。出来る限り探すよ」

《お願いします! じゃ!》

ピッ プープーパー

「ホントに行くの?」

「じゃないと、ヒビキくんが可哀想だろう?」

「そうなのかな……?」

「何でそこで迷うの!?」

「いやあ……。ヒビキだから大丈夫かなって思って」

「そういう問題じゃ……。まあ、とにかく、僕はヒビキくんの救出に行つて来るよ」

「行つてらっしゃい。頑張つてね」

「うん。じゃあね」

こうして私と、ミズキは別れたのだった。

とある人物との再会？（後書き）

新キャラ、ミズキです！

イエー！

>ミズキ<

ミズキです、よろしく。

>ニナコ<

ミズキは、本文中でも紹介したけど、私の従兄いとこよ。一応、男の子です

>ミズキ<

一応は酷いよ、ニナコ……。

>ニナコ<

だってホントの事だもん。

>ミズキ<

それに疑問に思ったんだけど、作者さん。

What?

>ミズキ<

何で女の子みたいな名前なんですか？

君のモデルが、女々しいからさっ

>ミズキ<

ええっ、酷い……。。

こついうのもアリかなぐみみたいなノリもある。

>ミズキ<

自信満々に言わなくても……。

次回！いつ投稿するかわかりません！
以上！

>ミズキ<

僕を無視しないで！！

【暗闇の洞穴】（前書き）

またまた新キャラ登場なのです！

……………次回ね

ヒビキ「ズコー！」

なんやねん、お前。

【暗闇の洞穴】

数分後

私は喫茶店を出て、ワニノコ達を受け取りに行った。

「みんな元気になったね。さ、行こうか」

私はポツポとオタチをボールに入れよう（なおそう）と思った。

「あ……。そうだ、ワニノコ」

「ワニヤ？」

「今回はポツポを連れて歩くから、ワニノコはボールに入ってたね

？」

「ワニヤ〜……」

何かテンションが落ちたな……（^^）；

「仲間のレベルアップだから、ね？ワニノコと同じレベルに合わせるだけだから」

「ワニヤ！」

「よし、良い子。戻ってワニノコ、オタチ」

私はワニノコとオタチをボールに戻してポケモンセンターを出た。

「さあ！ポツポ、レベルアップするよ！」

「ポツポー！」

私とポツポは30番道路に出た。

30番道路

ワサワサワサッ

私とポツポは草むらを進む。

むにゅ

「むにゅ？」

「キヤター!!」

「キヤタピー!?! いや、バトルだ! いけ! ポツポ! 体当たり!」
「ポツポ〜!」

ドンッ

「キヤター!? キヤター!!」

キヤタピーは糸を吐くを繰り返した。

「ポツポ! 避けてもう一度体当たり!」

「ポツポ〜!」

ドンッ

「キヤ、キヤター……」

「やった! いけ! モンスターボール!」

コツンッ

コンコン……

ボールが左右に揺れる。

もうちょい……! !

カチッ

「やっつったー！！！」

私は手を上げて& a m p・跳びながら喜んだ。

「新しい仲間だよ、ポツポ」

「ポツポー！」

で

その後、ポツポは順調にレベルアップしたわけで……。

「よし、次はオタチだね。ポツポ、戻れ」

私はポツポをボールに戻した。

その時のポツポの顔が悲しそうだったのは言うまでもなく……

(^^;)

「よしよし、オタチ出てきて！」

「オタツ」

「さ、レベルアップするよ！」

「オッタ！」

数分後

「……………疲れた」

「……………オタチ……………」

私とオタチは道のド真ん中に座りこんでいた。ここは31番道路である。

「ん？」

私はある看板に目が入った。

おもむろにその看板のところへ行った。

「『ここは【暗闇の洞穴】』……………」

「オタチ？」

その看板の矢印の方向を見た。

そこにはぽっかりと大きな穴が開いていた。

私は近くに通りがかった人に聞いてみた。

「ああ、【暗闇の洞穴】……………」

ポケモンが辺りを明るくする技を使えたら中を調べる事が出来るんだけどなあ」

なんてぼやいていた。

私が聞きたいのはそれじゃないんだけど……………。

まあいいや。

「オタツ、オタチ！」

私はオタチに止められているにかかわらず、何かに操られるようにその【暗闇の洞穴】へ足を運ぼうとした。

その時だった。

「止めなさい！！！」

後ろから声がした。そして、腕を掴まれた。

その時に私は我に返った。

【暗闇の洞穴】（後書き）

ニナコの腕を掴んだ主とは一体誰なのか？
次回をお楽しみに！！

ニナコ&p…ピピキ」……………」

とある人物との再会 ？（前書き）

「今度こそ、新キャラ登場！なのです！」

「どっかで聞いたような口調ね」

とある人物との再会？

「何してるの！」

その私の腕を掴んだ主を見た瞬間、驚いた。

「……………タクミさん……………」

「ニ、ニナコ……………。アンタ……………」

タクミさんが驚いた顔で言った。

「何しようとしてんの！？【暗闇の洞穴】はフラッシュを使わないと、お先真っ暗よ！？」

何か…………、怒られちゃった。

これが数時間も続くとは思いつかなかった。

数時間後

「分かった！？ニナコ！」

「はい……………」 正座している。

「返事が小さい！」

「はいいい…！」

毎回思っけど、タクミさんって誰かに似てる気が……………。

「何を考えてるの？」

にっこり笑っているタクミさんから黒いオーラが漂っていた。

そういえばまだタクミさんの紹介をしてなかった。

彼女の名前は、安来（やすぎ）タクミ。

れっきとした女の子。

身長は、160センチと、女の子にしては長身である。ミズキと7センチしか変わらない。

今の格好は、半袖のフード付きパーカーに、膝丈の半ズボンに、この地方には無さそうなカッコいいランニングシューズ、鞆はどっかのヒビキと同じバッグを背負^しっていた。

うん、かなりボーイッシュな格好。

あ、それと……………、

「……………そういえば、ミズキ見なかった？」

ミズキの幼馴染みなわけで……………（^^）；

「えっと、29番道路に……………」

「何しに行ったの？」

「ヒビキのお尻が地面にはまったから、某人気キャラクターの姫が蕪^{かぶ}を地面から抜くように、ヒビキを抜きに行きました」

「長い説明をありがとう（^^）； じゃあ二ナコ」
「？」

あれ？何か嫌な感じが……………。

「29番道路に行くわよ！」

「戻るんですかあああ！？」

「そうよ！って、は？戻る？」

「私、ワカバタウンに住んでるって言いませんでしたっけ？」
「……………」

何だろ、この沈黙……………。

「あ、そうか。29番道路、通るわね。……まあ行きましょう」
「あ、はい」

* * *

ヨシノシティ

「ふう、疲れた。ポケモンセンターで回復しましょう」
「はい、そうですね」

く、くたびれた……。
あんなに振り回されるとは思わなかった……。(^ ^ ;

「ポケモン達の回復が終わるまで喫茶店にいきましょう」
「あ、はい」

私はタクミさんと二度目の喫茶店に行った。

とある人物との再会 ? (後書き)

タクミ「ハロー」

「来たね」

ミズキ「あ、タクミ。久しぶり」

タクミ「……………チャンピオンの座は私が頂くわよ？」

ミズキ「イキナリ何!？」

「どゆことだよ？」

二ナコ「タクミさんは負けず嫌いで……………」

「チャンピオンになろうと努力したのにミズキに先越された、と
そういう事」

「なぐる」

タクミ「さあ、ミズキ。覚悟は良いかしら？」

ミズキ「え」

「大惨事になる前に、また次回！」

ミズキ「あっ！ちよっ！そっちの間接は曲がらなっ……………!」

合流？的な（前書き）

ニナコ「作者さん？」

えっ！な、なななな何かな、ニ、ニニニナコ？

ニナコ「動揺しているのがまるわかりですよ、作者さん」

ご、ごもつともです、ニナコ。

ニナコ「では、本編を、どうぞ」

合流？的な

喫茶店

「はい、くたびれたっ」

とか言いながら全然くたびれてなさそうに見えるタクミさん。

「そ、そうですね……」（^^；」

「あ、すみません。烏龍茶ウロンとオレンジジュースを1つください」

「はい、承りました」

私は何も言っていないのにタクミさんは勝手に通りかかったウェイトレスに飲み物を注文した。

ウェイトレスも笑顔で注文を受ける。

数分後

タクミさんが頼んだオレンジジュースと烏龍茶がウェイトレスによって運ばれてきた。

「はい、二ナコ」

タクミさんは私にオレンジジュースを渡した。

何故に私オレンジジュース？（^^；

「ふう〜。生き返るわ〜」（*´、*´）

「あー、美味しい〜」（*´、*´）

私とタクミさんがまったりしていると、

「おーい」

後ろから声がした。

「ん？」

その声に直ぐ様気がついたのは、タクミさん。

「あら、ヒビキ」

「あ、タクミねえ姐さん」

「あ、タクミ」

ヒビキとミズキのお出まし。

「見つけたわよ、ミズキ」

「え？」

「ねえ、何でチャンピオンの仕事をダイゴさんに譲るわけ？」

タクミさんが問いかける。

「譲ってないんだけど……。暫くの間チャンピオンの仕事を休むだけ。その間だけチャンピオンの仕事を代わりにしてもらっただけだよ」

「ふうん。へえ。だから？」

「うっ……。言い返しにくい事言うよね、タクミ」

「そういう性格よ、私は。まあ良いわ。アンタがここにいる間、私はミズキの代わりにチャンピオンの仕事するから。じゃあ、早速帰ってダイゴさんにチャンピオンの仕事を変わってもーらおう」

「タクミさん、ポケモンをまだ預けたままですよ（^^）」

「あ、そうだったわね」

すっかりしてるんだか、天然なんだか……（・・・）

「でもタクミ、何日か滞在するんじゃないかったっけ？」

ミズキが問う。

「そういえばそうだったわね。ところで、二ナコ」

「はい？」

「何処に行こうとしてたの？」

「え？」

何処って……。

「え」と…… (^ ^ ; A

思い出せない…… (^ ^ ;

合流？的な（後書き）

ヒビキ「おい作者」

ひいひい！？ってなんだ、ヒビキか。何か用？

ヒビキ「ニナコと俺との態度が違い過ぎるだろ（^^；まあ、そんな事はいいんだ。まず問題は『何故投稿するのが遅いのか』と、『どうして、musicさんとこのレオナより旅が進んでいないのか』と、『BWがもうすぐ発売されるのに、HGが終わっていないのは何故か』と言うニナコからの質問が来ている。序でに俺はパシリ

（ 「 「

では、お答えしましょう。

1つ目。何故投稿するのが遅いのかと言うとだな、アイデアが浮かばないのだ。

2つ目。以下同文。

3つ目。ゲームに沿って小説を書いているから。それだけ。

ヒビキ「それってかなりヤバくないか？（いろんな意味で）」

（いろんな意味で） I think so too.だよ、ヒビキ。

ポケセンで(前書き)

「二ナコ」作者S

「トビキ」って居ねえし!」

ポケセンで

「キキヨウシティ、だろ」

「そう！キキヨウシティ！」

ヒビキの助け船を出してくれた。

「あそこは確か、【マダツボミの塔】がある筈だ。あと、トレーナーズスクールと、一番最初のジム、キキヨウジムがあるんだ」

「へえ」

「ジムリーダーは、ハヤテさんだ」

「へえ。そうなの？」

私はそう言った。するとヒビキが『はあ』とため息を突いた。

「お前、ポケギアを使わないのか？」

「え？ポケギア？」

「やっぱり……。ポケギアに地図機能が付いているの、忘れたのか？」

ヒビキが呆れたような声で言った。

「あ……」

ポケギアの事、すっかり忘れてた……（。ー。；）

「せっかく持つてるんだから使わないとダメよ、ニナコ」

タクミさんに注意をされる。

「はい」

「ところで、タクミ」

「ん？」

ミズキがタクミさんに話しかける。

「いつまでここに居る？僕はジョウトとカントーのチャンピオンを倒したらって言うか、逢って、話をして帰るつもりなんだけど……」

「そう。なら、ミズキに付いて行くわ。でも残念ね」

「何がすすか？」

ヒビキが尋ねる。

「実は、二ナコ達の旅に同行しようかと思ってたのよ。ミズキがそうするなら、仕方ないわね」

「「「え!?!?!」」」

私とヒビキとミズキがハモる。

「え?ミズキ、知らなかったの?」

「うん、知らなかった。そんな事、聞いたことすらなかったよ」

「あら?そうだったかしら?」

「言っただつてもりで、言っただつたんじゃないすか?」(ヒビキ)

「あー、そうかもね」

「いや!そうだから!実際にそうだったからね!?!」

ミズキがタクミさんにツッコミを入れる。

うん、なかなかいいコンビネーションだ。

「二ナコ」

「ん?何?ヒビキ」

「ポケモン、取りに行かなくていいのか?」

「え?あ、もう時間過ぎてる!タクミさん!ポケモン取りに行きましよう!」

「ん?あ、そうね」

そういうことで、私と、タクミさんは、(預けた)ポケモン達を取りに走って行った。

烏龍茶と、オレンジジュース代をミズキに払っておくよう、押し付けてww

――ヒビキside

ニナコとタクミ姐さんは走って喫茶店を出て行った。
支払いは、ミズキ兄さんに負担された。

御愁傷様だな。

「何で僕が支払わなきゃならない？」
ミズキ兄さんが泣きそうな顔で俺に向かって言う。

いや、俺かて知らない。あとその手を話せ、ミズキ兄さん。

何はともあれ、ミズキ兄さんは結局烏龍茶とオレンジジュース代
を支払った。

「僕達も出よう」

「そーすね」

そうゆう事で俺達は喫茶店を後にした。

ポケセンで（後書き）

タクミ「他に言うことは？」

更新が遅れてごめんなさい……。

ミズキ「えっと、大体の人は察しがつくだろうけど、取り敢えず、簡単に説明するよ。」

逃げて来た作者を、タクミと僕が偶然見つけて、タクミがロープで巧みに捕らえたんだ。それで、署に連行させられて、事情徴収をしていたんだ。で、のが、……うん、なんだよね」

助けるや、ミズキ。

ミズキ「嫌」

ポケセンからの出発(前書き)

今回は短いぜ！

(あー、はいはい。

ポケセンからの出発

――ニナコside

私と、タクミさんはポケモン達を受け取った。

「あ

ヒビキ、アードミズキじゃあん？

……ってか何かミズキ、ヒビキに引き摺られてない？

「……何してるの？アンタ達」

タクミさんが怪訝けげんそうな顔して言った。

「いやあ……ちょっと……」「……」

ミズキが答えにくそうに言う。

「ミズキ兄さんがなげk「ぎゃああああ！言わないでえええええ！

！」黙れ「ご、ごめんなさい」「

ヒビキが何かを言おうとした。けど、ミズキが遮おさえった。そしてヒビキが黒いオーラを発していた。後ろ向いてたからどんな顔してたか分からないけど、ミズキが青ざめた顔でヒビキの顔を見ていた。

ってか何か、変なコントみたいなのを見てしまった。

「何、コイツら」

タクミさんの眉間に皺しわが深く寄った。

すごく怪訝けげんそう……。

「ニナコ、そろそろ行こうぜ」

「え？あ、うん」

何かヒビキ、俺系を通り越して男らしくなってない？（・・）

「へたれだったとでも言うのかよ！」

地の文読むなよ。

「何叫んでんの？ヒビキ？」

ほらあ、タクミさんが更に怪訝そうな顔するじゃないか。

「な、何でも……（^^）」

* * *

それから私達はポケモンセンターを後にした。
で、結局タクミさん達も付いてくる事になった。

30番道路

「ヒビキ、ここ何回往復してるんだろう……」

「俺はここを通るのは3度目だ。お前は俺より一足先に行ったじゃないか」

「あ、そうだった」

「忘れてたのかよ（・・）」

「ま、取り敢えず行きましょ」

何でそんな楽しみに言う？タクミさん（^^）；

「でも本当に付いてくるとは思わなかった」

あ、いけない。本音がついポロツと出てきてしまった。

「二ナコ、お前さあ、何気に酷いこと言ったよな」

「おっと、こりゃ失礼」

「軽々しく言うな（-_-）」

それから私達は【暗闇の洞穴】がある31番道路を通り過ぎた。

省略し過ぎでしょ、これ。

（突っ込んだんじゃ駄目だよ、ってか気にすんな。それにネタが無かったんだ） 作者

ポケセンからの出発（後書き）

えー、次回、キキョウシティに着きます。

「ナナコ」やる気ないですよ、作者さん」

たまたま。

キキヨウシティに到着！作者さん達の世界では……（前書き）

今回は若干長め！

それに今日は の日だから

キキヨウシティに到着！作者さん達の世界では……

キキヨウシティ

「わー！着いた〜！」

「キャター！」

「何興奮してんだよ」

ヒビキが呆れ気味に言う。

あ、ちなみに、『キャター！』っていうのはアタシのキャタピーね。
30番道路の途中の草むらで捕まえたの。って、知ってるか。

「ぼんぐりもたくさん貯まったしね〜」

「いや、それ関係ねえし（- - ;）」

「リル？」

マリルが首を傾げる。

「分かんなくても良いよ〜、マリル〜」

マリルの頭を撫でながら私は言った。

「お前なあ〜」

呆れた声でヒビキが言った。

「取り敢えず、ポケモンセンターに行きましょう。ポケモンを回復させなきゃ」

タクミさんが、私の肩に手を乗せて言った。

「あ、はい」

「ヒビキもよ」

「へーい」

ポケモンセンターへ歩いてみると、前方に大きな建物が見えた。

「およ？この建物は？」

「それは【トレーナーズスクール】だ」

ヒビキが私の質問に答える。

「ほえ〜。これが【トレーナーズスクール】〜」

「ニナコ達は家から遠いからね〜。知らないのもしょうがないわよね〜」

タクミさんが言う。

「じゃあ私から問題」

タクミさんがいきなり、

「あの、フレンドリイショップの隣にある高い建物は何なんだ？」
ポケモンセンターの前に立って言うてきた。

「え？」

私はタクミさんが指差した方を見る。

「え！？何あれ！？高！！」

私が驚いているとヒビキが、面白くない事に、

「あれが、【キキョウジム】だ」

と、答えを言うってしまった。

「せいか〜い、ヒビキ」

「あ、何で先に言うのさ！」

「知ってるからに決まってるだろ」

何何何、コイツ？（久々に触れたけど、）アキラくん並にちょっと酷くない？

「俺、一回見に来た事があるんだ」

「何勝手に見に行つてんの！？」

「いやいや、お前も居たから」

「あ〜？」

「『あ〜？』じゃねえよ、あ〜？『じゃ』

「そんなの覚えてないし！」
「こらこら。落ち着こ、ニナコ」
ミスキが私の肩に両手を置いて軽く押さえて言う。
「むっ」
「取り敢えず、ポケモンセンターに入るわよ」
「はい」

ポケモンセンター

「では、ポケモンをお預かりしますね」
私達はジョーイさんにポケモンを預けた。
「お願いしまーす」
私達はポケモンを預けた。
「どうする？ざっと見物にでも行く？」
タクミさんが私達に提案する。
「そうだね。ニナコは覚えてないようだし、ざっと見物に行こっか」
ミスキが答える。

うん、それ良いかも。

「じゃあ、ポケモン預けてる間にざっと見物にでも行きましょ」
タクミさんが言った。

「取り敢えず、ガイドはヒビキでww」
と私。

「何で俺！？ミズキ兄さんもタクミ姐さんもここ知ってるだろ！？」

「めんどくさい」

「酷え（；；）」

「ヒビキ、運命…いや、必然だと思いな、うん」

「二ナコまでかよ……（；；）」

「当ったり前だよwwヒビキにやらせないで、誰にやらせるんだよww」

「マジか（；；）」

コイツ弄いじんの楽しい

（悪魔だね by 作者）

小悪魔と言っつてほしいですね。

と言うわけで、ヒビキガイドさんと共に、キキョウシティの見物に出かける事にした。

とりあえず、ジョーイさんに、“キキョウシティを見て回って来るので、帰ってくるまで預かっていてほしい”とお願いして、外に出た。

外 ポケモンセンターの入口付近

「えっと、『前方に見えますのは、【トレーナーズスクール】と【

「マダツボミの塔】です」

「ヒビキがタクミさんが書いたメモを棒読みで読んでいる。」

「もうちょい感情込めろよ」

「私はボソツと言った。筈だったのだが……。」

「じゃあ、お前がやれよ!」

「え?嫌」

何で聞こえてんのさ。

「ほらほら、ちやっちやとやる」

タクミさんがヒビキにそっ促す^{うなが}。

はんっ!ヒビキはヒビキのまんまだな!

(当たり前じゃん。ヒビキなんだから by作者)

キキヨウジム付近

「さあ、次を紹介しなさい、ヒビキ」

タクミさんが言う。

「へーい。えと、『左手に見えますのは、1番目のジム、【キキヨウジム】。飛行タイプの使い手のハヤテさんがジムリーダーです』」

「ん。良くできました、ヒビキ。はい、アメ」

タクミさんはポケットを^あごそごそ漁り、中からアメを取り出して

「ヒビキに渡した。」

「あ。ありがとうございます、タクミ姐さん」

「あ、ヒビキだけズルイ!!!」

「じゃあ、ニナコにも」

タクミさんはまた、ポケットを「そこそ漁り、長方形の箱が出てきた。」

「はい、ポ キー」

「は、箱ごと!?!?!」

ミズキとヒビキがハモる。

箱ごと渡されたら、ビックリするよ、うん。

「でも何でポ キーなんですか?」

私がそう聞くと、タクミさんは私の耳元まで来て、囁くように、小さな声で、

「作者達の世界が今日、11月11日で、ポ キー・プ ッ の日だから」

と言った。

「なるほど、そうなんですか」

「?!!?!?!」

ミズキとヒビキはタクミさんが言った事が聞こえてないみたいで、頭の上に『?マーク』がたくさん浮かんでいた。

私とタクミさんは、クスクスと笑ってる事もよく分からないように、『?マーク』がやっぱりたくさん浮かんでいた。

キキヨウシティに到着！作者さん達の世界では……（後書き）

ヒビキ「なあミズキ兄さん」

ミズキ「んー？」

ヒビキ「タクミ姐さんとニナコ、何をコソコソしてたんだろっな」

ミズキ「さあ〜？（本当は知ってるけど）（ほんとう）作者に聞いてみたら？」

ヒビキ「いや、教えてくれねえだろ、絶対」ぜったい

ミズキ「でもさ、もしかしたら教えてt（ry

2人の会話聞くのめんどい。というわけで）、（ゞ

ミズキ「作者酷いよ！？僕が言ってる時に省略するなんて！」

知りません。ほいでは！

お母さんからの電話　いろいろな意味で衝撃を受ける（前書き）

へっへーん、投稿だぜ！

タクミ「投稿するまで約1週間……。作者にしては早いわね」

アタシに『しては』って酷くね!？

アタシかて、やるときゃあ、やるよ？

二ナコ「1週間の内に投稿っていうの、習慣になれば良いですね」

そ、そんな満面の黒い笑顔で言わないで、二ナコ……。。

お母さんからの電話　いろいろな意味で衝撃を受ける

ポケモンセンター

ピリリリッ　ピリリリッ

「おい、二ナコ。ポケギア鳴ってるぞ」

「え？あ、本当だ。…………お母さんだ。もしもし？」

《もしもし二ナコ？元気？》

珍しいことにお母さんが電話を掛けてきた。

本当^{ほんと}珍しい。お母さんから電話してくるなんて。

「うん。元気。あのね、途中でタクミさんとミズキに逢ったの」

《そうなの。で、2人は何処に行くって？》

「あ…………えーと…………、今、居る」

《ふーん…………。つまり？》

「一緒に旅してる」

《ヒビキくんは？》

「ヒビキも一緒」

《みんな一緒なのね。じゃあ、お母さんから提案》

「何？」

『じゃあ』って何だ、『じゃあ』って。

《ヒビキくんと別れて旅しなさい》

「え？あ、うん。何で？」

《いつまでも一緒じゃあ、面白くないじゃない。それに、ちょうど4人居るんだし、2・2で別れたら？》

「あー、うん。そうしてみる」

《ところで、今何処に居るの？》

「キキヨウシティ」

《ハヤテくんが居るところね。懐かしいわ》

「これから、ポケモン育てて、キキヨウジムに挑戦するつもりなの」

《まあ、ニナコがジムに挑戦！！見に行つて良いかしら？》

「ダメ」

《即刻拒否されちゃったわ》

「そう言えば、ヒビキん家のお父さんは？」

《居るわよ。ちょっと待つててね》

「ヒビキ」

「ん？」

「はい、おじさんから」

「あ？ああ。もしもし」

《もしもし、ヒビキ？元気かい？》

「んー。まあまあ」

《そうか》

「んじゃ、特に話すことねえし、切る」

《えー！？ちょ、待つて》

ピッ プープープー

「ん、ニナコ」

「あれ？もう終わり？」

ヒビキが私のポケギアを返した。

ヒビキ、絶対1分もおじさんと話してないな……。

「ああ」

「そう言えば、お母さんから提案があったんだけど、私とヒビキ、別れて旅しろって」

「……は？」

「みんなが啞然とする。それもそうだ。だって私が突然言い出したから、ね？」

「で、自分で思ったんだけど、ジムで一番早くジムバッヂをゲットした方が先に行くっていう風にしようと思ったんだけど、どう？」

「アタシは良いと思うわよ、そーゆーの」

とタクミさん。

「僕も良いと思うよ」

とミズキ。

「別に構わないが、何でイキナリ？」

とヒビキ。

「お母さんが、『いつまでも一緒じゃあ、面白くないじゃない』って」

「マジで？」

「うん」

「それじゃあ、2人共頑張らないとね。……というわけで、もう私達とお別れになるのかしら？」

「2・2つてお母さん言っていました」

「でも、こっちはあまり時間がないのよね……。四天王の方々の助手の仕事をいつまでも休んでるわけにもいかないし……。かと言って、ニナコ達を置いていくわけにもいかないし……」

「あ、それなら大丈夫です！私1人でも」

「ヒビキは？」

「あー、多分大丈夫です。材料と調理具と火と水などがあれば、野宿出来ます」

「うん、オーケー。じゃあ、ニナコとヒビキの初のジム戦見てから」

ミズキの用事を済ませに行くわ。そうしましよっ、ミズキ」

「うん、そうだね」

「の前にポケモン育てないと」

「そうだな。よし、二ナコ競争だ！」

と言ったと同時にヒビキが走り出す。

「私が絶対ハヤテさんに勝つんだから！」

私はそう言っ、ヒビキを追いかけて【マダツボミの塔】へと走った。

「元気よね」

「そうだね」

お母さんからの電話　いろいろな意味で衝撃を受ける（後書き）

タクミ「さあ！さっさとストック執筆^{っく}って、投稿しなさい！」

ヒビキ「ホレホレ〜。ヤレヤレ〜」

トビキ「おっ。トビキおっ。

ヒビキ「何で俺なんだよ！？」

酷い出逢い方 その1 (前書き)

年明けて14日たったな！。

タクミ「呑気ね」

ふっ。誉めてくれるな。

タクミ「誉めてないし」

さあ！今回からまたmusicさんのコラボが始まるぜい！！

酷い出逢い方 その1

【マダツボミの塔】の前

「ほええ。高い」

「【キキョウジム】に比べりゃ少し低いけどな」

「入ってみようよ、ヒビキ」

「ハイホー」

私とヒビキが【マダツボミの塔】に入ろうとした、その時、

ピリリリッ ピリリリッ

私のポケギアが鳴った。

「あ、もしもし」

《もしもしニナコ?》

「あ、タクミさん!」

《【マダツボミの塔】の入口前にいる?》

「はい」

《そう、分かったわ。気を付けなさいよ、ニナコ。あそこ、野生のポケモン出るから》

「はい、分かりました」

《あ、そうそう。私達はポケモンセンターで待ってるから》
「はい」

ピッ プープープー

「だって」
「いや、聞こえねえから。何の話してるかなんてわかんねえし」
「まったく、ちゃんと聞いたときなさいよ、バカヒビキ」
「バカヒビキゆるな、アホ」
「アホゆるな」
「とりあえず、タクミ姐さん何言なんつってた?」
「ポケモンセンターで待ってるってさ。まあ、入ろーよ」
「ぬ」
「『ぬ』って何さ、『ぬ』って」

【マダツボミの塔】

「ほえー。太い柱」
「すげえよな」
「うんうん!……あれ?」
「ん?どうした?」
「いや、何か柱が揺れてるように見えるんだけど」
「え?……マジかよ。ホントに揺れていやがる」
『バタフリー、“風起こし”!』
「ほえ?」
「どうした?」
「誰かの声がする」
「行ってみるか?」
「もちっ」

私達は階段をやったのことで見つけ、階段を上がって、その声の方へ行った。

「誰が戦ってるんだ？」

「知らないよ、だから確かめに行くじゃん。でももう終わってるみたい」

その時、誰かがボールを構えていることに私は気付かなかった。

酷い出逢い方 その1 (後書き)

ふっ。どうだ。読みにくかろう。

タクミ」だから誉めてないっての

酷い出逢い方 その2 (前書き)

タクミ「1日に二話連続投稿だなんて……！季節外れの台風が来るわ！それが、火の雨が降ってくr (ry」

なんかすげえ衝撃受けてる人がいるんだけど…… (^^ ;

ねえ、みんな。いくらなんでも……………え。

ニナコ 目が点

ヒビキ 動きが止まっている

ミズキ 魂が抜けそう (ww)

アキラ 普通にしている

このKYがあああああ！！

アキラ「黙れ作者」

アキラ後でコース

こうして、アキラに、死亡プラグが立てられたのだった。

酷い出違い方 その2

「そこだ！ リオン、ねこだまし！！」

「ほえ！？」

「うわっ！？」

誰かが、私とヒビキにねこだましをしてきた。

私とヒビキは驚きのあまり、転んでしまった。ヒビキの転び方は何でか知らないけど、尋常じゃなかったww

「うん、悪いやつではなさそうだな。戻れリオン」

少し男っぽい口調の人が言いながら、リオンと呼んでいたポケモンをボールに直した。

「てスバルさん！？ 何してるの！？」

ねこだましを使ってきたトレーナーの後ろから、私と変わらないくらいの女の子がそのトレーナーに言った。どうやら、そのトレーナーの名前は、スバルと言うようだ。

「確認」

意外にもそのスバルというトレーナーは素っ気ない返事を女の子に返した。

女の子は少しため息を漏らし、私達の方を見て、微笑んで手を差し伸べ、

「大丈夫？」

と訊いた。

「あ、うん。大丈夫……………」

私はその子の手を借りて立ち上がりながら言った。

「隣の男の子はどうするの？」

「え？ヒビキ（コイツ）？ほおっておくの。私より驚いてたから、腰を抜かしちゃったんだと思うし。ほっておけばいずれ治るし」

「そ、そっか」

「あ、手を貸してくれてありがとう。私、ワカバタウンに住んでる

若月ニナコって言うの。貴女は？」

私は彼女の両手を両手で握り、言った。

「奇遇ね。アタシもワカバ出身なの。アタシはレオナ。江崎レオナよ。宜しく！」

レオナという女の子は、ニコツと微笑んだ。

「こちらこそ宜しくね！」

「ちよつ、俺も助けてくれよ！」

ヒビキが腰を抜かして地べたに手をついていた。

「嫌」

ずつとそのまんまで居ればいいさッ

「酷え」

なんか、レオナちゃんがヒビキを哀れみの目で見てるしww

「あー、と。さっきはおどかしてごめんな。あたしの名前はスバルだ。宜しくな！」

いつの間にかスバルと言うさっきのトレーナーは、レオナちゃんの後ろにいた。

よくよく見ると、タクミさんと同じくらいじゃん！

「よ、宜しくお願ひします！」

と私は返した。

「……ちよつと言いつらいけど……さ。スバルさん、実はね」

「あたしには敬語使わなくてもいいぞ」

レオナちゃんが私に小声で説明しようとしたとき、スバルさんというトレーナーが言った。

「あ、それじゃ、遠慮なく」

「だから、俺を起こしてくれよ！」

「だから、嫌だって言ってるじゃん。アンタの耳は節穴？」

「ところで、ニナコちゃん」

「ニナコでいいよ」

「あ、じゃあ、ニナコ。【マダツボミの塔】に何しに来たの？」

「ジムに挑戦するために、レベル上げに来たんだ。ヒビキもなんだ

けど、ヒビキ絶対殺られると思うんだ」

「なんだと!!」

ヒビキは腰を抜かしていたはずなのに、いつの間にやら、私の傍に来て立って言っていた。

「だって、見るからにそんな感じするじゃん」

「んだと〜!」

「まあまあ。落ち着け」

スバルさんがなだめた。「ところで、お前ら2人だけで来たのか？」

「いや、付き添いつてか、一緒に旅してる人と一緒に来たんだ」

ヒビキが答えた。私が言おうと思ったのに……!ヒビキ、後でコ

ロース

「それ、誰だ？」

スバルさんが周りをキョロキョロ見回していた。

「今は居ないの。今はポケモンセンターに居るの」

「そうか。じゃ、行くか」

「『え!?!』」

酷い出逢い方 その2 (後書き)

結果、アキラはこてんぱんに殺られた。

ふっ。

私に勝てると思っなよ？

あ、musicさんの『ポケットモンスター チャンス』とコラボ
しているので、そちらもご覧ください！

登場人物の紹介（前書き）

はいはい。今更ながら、登場人物たちのプロフィール的なものを投稿するぜい

タクミ「勝手ね」

ふっ。誉めるん

タクミ「誉めてないからね」

登場人物の紹介

若月 ニナコ

年齢：10歳

性別：女

性格：元気で、しっかり者。けど、たまにドジる。

身長：146cm

特徴：スマイレ色のショートヘア。紫色の瞳。

その他：ワカバタウンに住んでいる。ウツギ博士のお使いの為に貰ったワニノコのパートナー。ヘタレヒビキの幼馴染み。アキラのトレーナーズカードを持っている。

菜加^{さいか} ヒビキ

年齢：10歳

性別：男

性格：若干ヘタレ。何か鋭いところがある。

身長：149cm

特徴：黒い髪に、明るい茶色の瞳。帽子を被っている。

その他：ワカバタウンに住む。幼馴染みのニナコのお使いに付き合い合わされた拳げ匂、地面にケツが填^はまって自力で抜けなかつた不憫な人。

若干ヘタレ混じり。何故か時々俺系になる。しかもなんか鋭いところがある。マリルのトレーナー。

陽真^{まのま} アキラ

年齢：10歳

性別：男

性格：プライドが高い。冷静。

身長：150cm

特徴：肩ぐらいまである赤い髪。赤黒い瞳。赤黒のジャージ(?)。
その他：ウツギ研究所からポケモン(チコリータ)を盗むが、二ナコにトレーナーカードを盗られる。あまり出番がない事が最近の悩み。

安来 あしかげ タクミ

年齢：12歳

性別：女

性格：しつかり者で、負けん気が強い。時々ボケる。

身長：160cm

特徴：短い黒髪に、燃えるような赤い瞳。

その他：ボーイッシュな服が好き。

ホウエン地方の出身で、ミズキの幼馴染み。ホウエンの四天王

(全員)の助手をしている。

丹隅 にすみ ミズキ

年齢：12歳

性別：男

性格：おっとりしていて、優しい。何かをきっかけに、性格が男らしくなる(時がある)。

身長：167cm

特徴：青い髪に、黒い瞳。

その他：タクミ同様、ホウエン地方の出身。ダイゴさんを継ぐ、次期チャンピオン。と言うより普通に現チャンピオン。

二ナコの従兄いとこにあたる。

登場人物の紹介（後書き）

また付け足しとかあるかも知れないんで。

まあ、特に関係ないんですけどw w

ではでは（^^）／

辿り着いた先は（前書き）

いやー、遅くなった。

タクミ「反省してないわね」

うん。当たり前。

だって自分馬鹿だし？

タクミ「（どーでもいいー）」

辿り着いた先は

「と、突然すぎるわよ!」

レオナちゃんがスバルさんに言う。

「いいじゃん。じゃ、Let's go!」

何だか無理矢理な気が……(; ;)

* * *

と言うわけで、私達はポケモンセンターに戻ってきた。

「何処に居るんだ?」

「あっち、と思う」

私が指差したのは、青い髪で木みたいな服のミズキと、黒髪でグレーのパーカーを着ているタクミさん。

「! まさか!!」

スバルさんは何故かタクミさんとミズキに反応して、走っていった。

「どうしたんだ?」

どうやらお馬鹿なヒビキは分かっているようだ。

私が指差したところが見えなかったのか? あ、見てなかったのか。じゃ、10回コロそ

「そんなの知らないわよ馬鹿頭」

ヒビキの言った事にレオナちゃんは、ヒビキを罵っている。

「バカ頭ってなんだよ!」

ヒビキ反論。

「馬鹿頭じゃん」

私も言った。だって、マジの話。ヒビキはヘタレで馬鹿ですから
「お前ら酷え」

ヒビキはレオナちゃんと私の言葉によって、撃沈した。

撃沈するの早いね、ヒビキ。

「まあ、私達も行くつよ、レオナちゃん」

「あ、うん」

む？レオナちゃん、何か言いたげだけど……。まあ、いつか

私と、レオナちゃんは、タクミさんの元へ走って行った、スバル
さんを追いかけた。

辿り着いた先は（後書き）

次回はいつ投稿するか分かりませんZ E

驚き（前書き）

今回はタクミ視点でふよ。

タクミ「噛んだの？」

いせ、わねじ。

驚き

-----タクミside

ふう、ポケモン回復出来たし、喫茶に行つて、パフェをミスキに奢つて貰つたし。うん、暫くは休憩しちやお。

そう思った私は、ポケモンセンターのカウンターの近くのソファに座る事にした。

「後で部屋借りに行かないと……」

ポケモンセンターには、宿泊施設も喫茶店も、レストランもあるから、結構便利

やっぱ何処の地方も利用する人の事を考えてるんだなあって、改めて思った。

そう思っていたら、何かが私とミスキに向かって走って来た。

「な、何!？」

「見つけたぜ、タクミ」

「え……」

一瞬、誰だか分からなかった。だけど、声を聞いて分かった。

「スバル!？」

驚き（後書き）

次回、二ナコ視点に戻ります。

新事実(前書き)

特になし!

タクミ&ニナコ&ミズキ「ええええええ!?!」

新事実

.....二ナコside

「ねえ二ナコ」

私はレオナちゃんに話しかけられた。

「なあに？」

思わずなんかやんわりとした口調で返してしまった。

「アタシのこと呼ぶとき、呼び捨てでもいいよ」

「え、本当に？　じゃあ呼び捨てにするね、レオナ」

私はレオナちゃん……じゃなかった。レオナと呼び捨てすることにした。そう思っていたら、タクミさんとミズキとスバルさんが話しているカウンターの近くのソファアに着いた。

スバルさんとタクミさんは何だか楽しそうに話してる。

「彼処あそこでの技が外れてたら勝ってたのにな〜！」

ちよつと悔しそうに言う、スバルさん。

「今言つても過去は変わらないのよ」

とタクミさん。

スバルさんとタクミさんは、知り合いみたい。

「あ、レオナ。どうしたんだ？　そんな顔して」

スバルさんがそう言ったのを聞いて、レオナの様子を見たら、目が点だった。

大丈夫かな？

「あら二ナコ。いつから居たの？」

「さっきですよ、タクミさん」

私は言った。

「ニナコも、スバルさんも、この人と知り合いなの？」
レオナは、恐る恐るといった様子で、私とスバルさんに訊いてきた。

「え？ライバルの幼馴染みだし、知ってるさ」

スバルさんはあつさりと答える。

「ミズキとスバルさんってライバルだったんだ！？」

私の知らなかった新事実。

そんなの聞いてないよ！？

「スバルが勝手にライバル視してるだけだよ」

上の服が緑色で、ズボンが茶色という、摩訶不思議な格好をしたミズキがタクミさんの横から顔を出して言った。

あれ？何か木みたい……？

そう思った私は、

「「あ、木」」

と言った。

……あれ？誰かと八モった？

と思つて隣を見たら、レオナだった。何か、思わず言っちゃつたつて顔してる。

「酷くない!？」

木のような服を着た何かイタイ人 通称ミズキは、泣きそうな顔をして言った。

「今さらですけど、スバルさんって、タクミさんの知り合いだったんですか」

「そうよ。一瞬だけだか分からなかったけどね。だって、急に来られたら誰だってパニックって分からなくなるわよ」
タクミさんは笑って言った。

新事実（後書き）

次回も期待しないでください

ヒビキの災難（前書き）

今回は、ヒビキに悲劇が襲われますww

ヒビキの災難

「……暇」

ヒビキが言った。

ってかヒビキ居たんだけ？ごめん、全っ然分かんなかった

「ヒビキー」

「あ？」

ヒビキが不満そうな顔で、更に、不満そうな声で言った。

「ちよつと表に出る」

私は、ヒビキの襟首を掴んで、ズルズルと外まで引き摺ずって行くようにする。

「え？それって喧嘩に行くのとおんなじあ、ちよつ……！く、くるじっ………！」

何かヒビキが苦しそうにしてるけど、知らない どうせ死にやあせんだろっし。

「何処に行くの？ニナコ」

タクミさんに問い質ただされた。

「あ、ちよつと外に出るだけなんで、心配しないで下さい」

私はニコツと微笑んで言い、ヒビキを引き摺ずって外（ポケモンセンターの裏口）へと出た。

「な、何……ん……よ……！」

ヒビキはもがいている。

「ごめん、何言ってるか分からないよ」

「じゃ、は……せ！」

「しょーがないね、ヒビキは」

私は苦しそうなヒビキの襟首を解放^{はな}してやった。

「はぁー、はぁー、はぁー……。く、苦しがつた……。ってか何すんだよ！」

「え？何って、裏口に來ただけなんだけど？」

「意味わかんねえし」

「分かんないのか。キミは実にバカだなあww」

「じゃあ、何で裏口に連れて來たんだよ！」

「暇って言ったのは、ヒビキでしょ？」

「だから何なんだ？」

「だから、暇潰しでもしてあげようと思って」

「黒っ！」

「さあヒビキ。覚悟はよろしくて？」

「な、何するつもりだ」

「え？何ってそりゃあ……。間接外し、でしょ」

「いやいやおかしいだろ！？……っておい？そっちに腕は曲がらな

いぞ、ニナク「えいつ」「バキィツ」ぎゅわあ！？」ていつ

『ゴキィツ』グフツ！「たあっ」「ガコンツ」ぎやああああ！」

ヒビキの叫び声は、響き渡らず、ポケセンの裏にある公園の木々達によって吸収された。

「ふう。……ヒビキ、御愁傷様つ。それじゃ、私は戻るからっ 心

配しなくても、間接はきちんとはめておいたからっ」

そして、私はスキップしてポケセンに戻って行った。

ヒビキの災難（後書き）

次回に続く。

血痕(前書き)

今日は、ニナコにあねがついてますww
ww

血痕

ポケモンセンター内

「お帰りニナコ……ってニナコ!?!」

レオナの顔が青ざめていく。

「?どうかしたの?レオナ」

「ニナコ、血」

タクミさんが言う。

「ち?」

「そう。血よ、血。血液よ。至るところに付いてるわよ」

タクミさんは冷静にかつ、呆れた様子で言った。

「ああ、返り血ですか。じゃあ、お手洗い行って来ますね」

よくよく見れば、服にも少し付いてる。

おかしいなあ。服には付かないようにしようと思ったのに。

「あ、アタシも行くよ、ニナコ」

レオナが言ってきた。

「いや、大丈夫だよ。鮮血だから、多分すぐ取れると思う。でも液体だから、シミなって残るかも……」

「とりあえず行こう。乾く前に」

「うん。それじゃ、お手洗いに行ってください」

「はいはい」

タクミさんが返事した。

というわけで、私とレオナは、ポケモンセンターのお手洗いに行
った。

「ねえニナコ、何があったの？」

服に付いた血を水に流していたら、不意にレオナに聞かれた。

「え？ちよつとヒビキを苛めてたんだ」

私はてへつと言いながら笑った。

何かレオナが腑に落ちないみたいだけど、気にしな～い

「苛めてたって言うより、遊んでただけだよ。ヒビキが暇そうにし
てたから、暇潰しでもしてあげようと思って」

あれ？私何か（腹）黒い…………。

「そ、そうなんだ…………？」

あれー？レオナー？顔が青ざめていつてるヨー？もしかして私何
か怖い事言っただけ！？

（もしかしなくても怖い事言ってるよ）^^； byネコ

…………まあとりあえず、気を取り直して、服に付いた血痕を頑張っ
て落とそうと擦るもの、なかなか取れない部分がある。

むー。着替えようかな。確か、お母さんがポケモンセンターでク

クリーニングしてもらえるのよーって言った気がするな。まあ出してみようかな。

「血……取れないね」

レオナが言った。

「だね。頑固な血だ」

ヒビキの血……。許さない

「……着替え、取ってこようか？」

レオナが恐る恐る訊いてきた。

「本当に！？^{ホント}ありがとう！タクミさんが私のバック持ってると思うから、持ってきてよ！」

着替え取ってきてくれるだなんて、ありがたい！

「うん。……でもさ、服はどうするの？」

やっぱりそうきた。

「服はクリーニングに出すんだよ。ポケモンセンターで、クリーニング出来るらしいから」

「じゃあ、大丈夫だね。それじゃ、アタシ取ってくるね」

レオナは、走って言った。

「うん。ありがとー！」

私はレオナにお礼を言い、レオナがお手洗いから出た後、一生懸命擦って血を落とそうと励んだ。

血痕（後書き）

次回に続く

新たな出逢い（前書き）

今回は、トビキsideとタクミsideです。

新たな出逢い

- - - タクミ side

私たちは楽しく談笑していた。そうしていると、レオナと言っ子が戻って来た。

「あ、レオナ。服の血は取れたか？」

スバルが何故か楽しそうに言う。

「ううん。なかなかとれないから、着替えとりにきたの。タクミさんって人がバックを持ってるって言ってたけど……」

さては二ナコに頼まれたな。

^{アタシ}私はすかさず、

「このこと？」

と二ナコの（ポストン）バックを持ち上げて言った。

「あ、多分それです！ありがとうございます！ではっ！」

レオナはそのバックを受けとると、急いでお手洗いへと走って行った。

- - - ビビキ side

「ち、ちくしょー……。暇って言わなきゃよかったぜ……」

俺は今、自殺した人の様な（うつ伏せの）格好で動けずに居た。

ニナコめ……手加減しなかったな……。

そう思っていると、誰かの足（靴が）見えた。

「ん？」

「大丈夫ですか？」

誰かが、屈かがんで俺を見ている。

「だいじよばん……」

俺はそいつを見て言った。

ん？どっかで見えた顔だな……。何か、スバルって人と似てる気が……。

新たな出逢い（後書き）

次回に続く

自己紹介(前書き)

二ナコsideに戻ります。

自己紹介

- - - ナナコside

レオナは私のバックを持って返ってきた。

「はい」

「ありがとう！助かるよ！じゃあ着替えてくるね」

そう言っただけで私は、トイレの個室に入った。

私は服を脱いで、服を見てみた。

結構こびり付いてるな、ヒビキの血。

私は、バックから袋を取り出して、その中に服を入れた。そして、その袋をバックの中にした。

「ふう。これで一件落着」

私はそう言っただけでトイレから出た。

「じゃ、戻ろうか」

レオナは、トイレから出てきた私に言った。

「うん」

* * *

そして、タクミさん達が居るところに戻った。

「着替え終了？」

ミズキが言う。

「うん」

私は頷いた。

「なあ、いつになったら自己紹介するんだよ？」

「「「あ」「」」

レオナとタクミさんとミズキがハモった。

「てめーら、忘れてたのかよ」

スバルさんはため息をつきながら言った。

何か呆れられてる……（^^；

「じゃ、気を取り直して自己紹介しよう。僕はミズキ。宜しく!」

「私はタクミよ。宜しくね」

タクミさんとミズキがレオナに自己紹介する。

「えっと、アタシはレオナです。宜しくお願ひします!」

レオナがタクミさんとミズキに自己紹介した。

「……レオナ」

「? どうかしたんですか?タクミさん」

「ヒビキは?」

「ヒビキは、もうちょっと新鮮な空気を吸ってから戻って来ると思
いますよ」

「あら、そっつ

自己紹介（後書き）

次回に続く

タクミ「って、そればっかじゃない！ってか最近予約投稿多くない？」

気のせい。

タクミ「気のせいなわけないでしょうが。しかも話少ないし」

しょうがないじゃん。

タクミ「だから何よ？」

………そいでは。

タクミ「こら！逃げない！」

手当てと豹変

・・・ヒビキside

「とにかく、手当てをしないと。じっとしてくださいね」
そいつはバツクを漁る。

別に手当てしなくてもいいんだが……。まだ、軽い方だし。

「お前、誰だ？」

俺はうつ伏せの状態でそいつに訊いた。

「僕は」

ザアアアア

そいつの声は、途中で風に揺れる木の葉の音にかき消され、聞こえなかった。

「ん？今なんて」

風でよく聞こえなかった。

「黙ってて。確かに自己紹介は大事だけど、あまり喋らない方がいいから」

「でもさ」

気になるしよ……。

ブチッ

何か切れる音がした。

「ど、どうしたんだ？急に手を止めて」

しかも黙り込みやがった。

数秒後、いきなりそいつが、

「お前なア、さっきから黙れって言うてんのに何で黙らねんだよ

！？ああ！？」

俺に怒鳴った。

「！？」

はあ？どーゆー事だよ！？何でコイツ性格変わってんだよ？

「大体よオ、こうなったのは自分がなんかしたらいかんことをやったからじゃねえのか！？それを手当てしてやるっつーのに、ずっと自己紹介にこだわoryやがって！！

これならミコトの姉のがマシだ！！あいつも自己紹介は大事だと言う。自己紹介それにこだわったりもする！

だけど、緊急事態の時はそんなことを言うてらんねエ。それが分かっているんだよ！

それともなんだ！お前は死にたいのか？」

一気にどーんといろんな事言いやがった。どーせ俺は（器の）小さい男だよ！

「とにかく黙ってる。手当てするから」

そいつは一呼吸置いた後、冷静になって言った。

「……」

* * *

暫くして、手当てが終わった。

「よっし、終わり！ もう大丈夫だ」

「あ、ありがとう……」

コイツ、変わった奴だ。二ナコの次に怖い。

「どうした？ なんか不満でもあっか？」
突然聞かれた。

「い、いや！ なんもない！」

いけね。思わず言っちゃまった。ってかそついやぁ……。

「あつ、そついえば俺の自己紹介まだだったよな？ 俺h」

「ちよつと待った！」

名前を言おうとしたところで、遮られた。

おい、何で止めた！？

「何だ？」

「あと15秒後に名前言ってくれね？ 正直、俺が知っても意味ね
エシ」

そいつは頭を掻きながら言った。

「？ どういうことだ？」

しかも何故に15秒？

「あーもう！ 説明は面倒だ！ とにかく名乗るのは15秒後！ いいな
！？」

「わ、分かった」

何なんだ、コイツ。

そいつは目を閉じて、深呼吸した。力を抜いた感じだ。

数秒後、そいつは目を開けた。さっきみたいな鋭い目付きではなく、最初に逢った時と同じ目をしていた。何故かきよんとしている。

「……13、14、15！15秒たったから自己紹介させてもらうぜ！俺はh」

「君ってすごいね！あれだけの怪我を自分でどうにかできるって！」

俺は、自己紹介をまた遮られた拳げ句、両手を両手で掴まれた。

「へっ？」

本^{ホント}当に何なんだ、コイツ。急に性格は変わるわ、怒鳴り付けてくるわ。怒鳴り付けてきたと思ったら元の性格に戻っているわで、本^{ホント}当によく分からない奴だ。

「いや、俺、お前にしてもらったんだが……。それにこの傷はこれでも軽症だぞ？」

「え？」

コイツ、俺がアレで死ぬと思っていたのか……。まあ普通の人なら生と死の境を行き来しているんだろうが。

つまり、俺が尋常じゃないってこった。

「でも僕は何もしていないけど……」

「いや、お前がやったぞ？」

コイツ、覚えてないのか。……って事は、コイツ……。

「もしかしたらお前、多重人格だろ？」

「え？知らないけど……」

「んー。分からないのか。まあ別にいい。とにかく、俺はポケモンセンターに戻るわ」

「その前に名前を教えてよ。僕は北風ミコト」

「俺は菜加^{さいか}ヒビキだ。ワカバタウン出身だ」

「そっか。ヒビキ、僕もポケモンセンターに行くよ」

「何で？」

「ジムの予約はもう済ませたし、やることないし、この町の事知らないし。まずはポケモンセンターから行こうかと思って」

「ああ、それで」

「ってかジムの予約って、コイツハヤテさんとバトルすんのかよ！
？見るからに実力者って感じだな。」

「まあ、ついでだし、行こうぜ」

「あ、うん」

手当てと豹変（後書き）

次回に続く

新たな出逢い (その2) + (前書き)

ニナコsideに戻ります

新たな出逢い (その2) +

---ニナコside

「さてと。部屋を借りに行こうかしら」

タクミさんは、伸びをしながら言った。

「そうですね」

「スバルとレオナは？」

「アタシらはもう部屋は借りてるから、大丈夫だ」

スバルさんはニカツと笑って言った。

「そうなの。じゃ、ミズキ、借りに行くわよ」

「あ、うん」

タクミさんとミズキは、カウンターに向かった。

「スバルさん！？ アタシまだ借りてないよ！？」

あれ？そうなの？

「あつ、そうだったのか？ でもまあいいや」

スバルさんは笑い流す。

「笑い事じゃないわ！」

レオナは少々お怒り気味に言った。

「安心しろ、レオナ。実はな、借りれる部屋が四人部屋しかなかったんだよ。だから、レオナが構わんなら一緒にいいよなってさ」

スバルさんがニコニコしながら言った。

その言葉に納得そうに、

「アタシは構わないわ」

と言った。

「よっしゃ、それじゃ決まりな！」

その時、誰かが話しかけて来た。

「あれっ、レオナじゃん！ 姉さんまで！！」

「ミコト！？」

「誰？」

私にはよく分からない。

でも、レオナの知り合いつて言うのは確かだね。

「ん？」

ミコトと呼ばれた男の子の後ろに、見慣れた姿を発見した。

新たな出逢い (その2) + (後書き)

次回に続く

ミロトの謎とミズキの災難（前書き）

今回は暴さん家のミロトが（前半に）出てきます（、（

後半はミズキがニナコによって連れ出されますww

ミコトの謎とミスキの災難

「ヒビキ……。生きてたんだ……」

「おい！？それ酷くねえか！？俺が頑丈なの、知ってるだろ！」

「そーだったけー？」

「しらばっくれんな！」

私はヒビキの肩の付け根の部分を見た。綺麗に包帯で巻いてある。きつと、今レオナとスバルさんと話している男の子が手当てしてあげたのかも知れない。

しなくても自然に治るのに。

「ところでヒビキ、あの男の子は誰？」

「北風ミコト。多重人格者っばい」

「ふーん。そーなんだ」

何か想像しづらいな。でも、何か（バトルに）強そうな子だな。

自己紹介しておこつ。自己紹介は大切だからね。

私はミコトくんと言う男の子のところへ行き、自己紹介を始めた。

「え、えつと……。ミコト……。くんだけ？こんにちは、初めまして。私、若月ニナコって言うの。よろしくね」

私はニコツと笑って挨拶した。ミコトくんは、何故かびっくりしていた。

「どうしたの？」

レオナがミコトくんに聞いた。

「いや、ヒビキと僕で態度が違いすぎるなアって。あと呼び捨てで

「いいよ」
「そうかな？」

「そうでもないと思うんだけどな。」

でも呼び捨ては出来ないよ。だって、ヒビキは幼馴染みだけど、ミコトくんはさっき知り合ったんだし、くん付けしないと、私自身が落ち着かない。

「うん。あ、そう言えばさっきヒビキにも言われたんだけど、僕って多重」

それをミコトくんが言い終える前に、スバルさんがレオナと私とヒビキの腕を掴んで、ロビーの端に連れて行った。

「ど、どうしたの スバルさ」

「いいか、よく聞け。」

「ミコトの多重人格のことは誰にも言うな。忘れる。いいな？」
「何でだ？」

ヒビキはスバルさんに質問する。しかしスバルさんは、

「い・い・な？」

と、威圧感たつぷりに言った。

「は、はい……」

ヒビキは申し訳なさそうに返事した。

「以上だ。あつちに戻るぞ！」

そう言ったスバルさんは、再び私たちの腕を掴んで走り出した。

* * *

カウンター近くのソファに戻って来た。そこには、タクミさんとミズキとミコトが座っていた。

「あら。何処に行つてたのよ、4人とも」

「「「いや、少し色々とありまして（^^）」「私とヒビキとレオナはハモつて言った。」

うん、色んな意味で色々……ね……。

「何の話をしていたんだい？」

ミズキが聞いてくる。

殺しても罪にはならないよねっ

「ミズキ、顔貸せや」

私はミズキの真正面に顔を近づけ、小声で言った。

「ひいっ」

ミズキは顔を青ざめ、小さな悲鳴をあげた。

「何してるの、二ナコ」

タクミさんが聞いてきた。

「いえ、特に何も」

私はニツコリとタクミさんに微笑んで見せた。

「あら、そう」

「ちよつとミズキ借りて行きます」

私は、ミズキの服の襟を掴んで、タクミさんに言った。

「ええ。構わないわよ」

「ええ！？そ、そんなタクミ……！」

「大人しく連れて逝かれなさい」

「漢字が違つてうぐげえっ！」

「そこは関係ないわよ」

タクミさんは、ミズキの鳩尾にチョップを入れた。その衝撃で、ミズキは気絶した。

私は、レオナ達をチラッと見た。レオナとミコトくんは、顔を青

ざめていたのに対し、スバルさんは笑っていた。どうやら笑いのツボが分かるようだ。

「それじゃ行ってきまーす」

私はミズキの襟を掴んで再びポケモンセンターの外へと向かった。

ミロトの謎とミズキの災難（後書き）

次回に続く

新事実(その2)と災難再び?(前書き)

じゅん。

新事実(その2)と災難再び?

---タクミside

「それじゃ行ってきまーす」

ニナコは、ミズキの襟を掴んで再びポケモンセンターの外へと向かった。

「姉さん、よく笑えるね……」

ミコトが引いている。

ミコトにはまだ早いよww

「だって、ミズキが年下ニナコの女の子に脅えてるんだ、笑うなって言う方が無理ッ……!!」

スバルは大笑いするのを止めて言った。堪えてはいるけど。

「そう言えば、ミズキ兄さんとスバルさんはどういう関係だ?」

ヒビキが訊く。

「だから言ったる、ライバルだってよ」

「じゃあ、何でライバルになったんだ?」

ヒビキ、しつこいわよ。

「あー、それな。ミズキに負けたんだわ。ホウエンリーグ決勝でスバルが答えた。」

「スバルさん!? 今、何故かリーグ決勝って聞こえたんだけど、聞き間違いよね!？」

レオナはびっくりしながらスバルに訊いた。

「だからあんとき言ったろ、『もう一匹連れてくる予定だったけど忘れた』って」

あん時？

「そんなのおかしいよ！本気のバトルなら、絶対六匹連れてくるはずだ！！」連れてくる筈だった」なんて嘘だ！！

もしかして手抜き！？なんとか言いなよ！！」

「えっ、あのバトルスバルは手を抜いていたの！？」

嘘でしょ！？あのバトルで！？

「だから手抜きじゃない」

「手抜きじゃなかったのなら、なんで六匹連れてなかった」

「あ、ミズキさんが走ってくる」

ヒビキが言った。

「このKY。何で今言うのよ」

「俺はKYじゃねえ！」

でも私は、^{あたし}ヒビキが言った方を見た。本当にミズキが走ってこっちにくる。でも……、

何かボロボロね。何かあったのかしら。

(そんなに深く考えてない)

「た、タクミ……！助けてくふうッ！」

ミズキは私が繰り出した鳩尾チョップ (本日二回目) を喰らった。そして私はミズキの耳元で、

「ごめん。今、それどころじゃないの。ヒビキと一緒に「ナコ」のところに逝うときなさい。10回ぐらい死んでくれればいいわ」

と、少し微笑んで見せて囁いた。

「ひ、ひいいいっ！」

そう言っつてミズキはまた気を失った。ミズキは完全に怯えていた。

まあ、無理もないわ。二ナコに散々殺られた挙げ句、+（プラス）
また殺られるんですもの。

「どうかしたのか？」

スバルはよく分からないといった表情で訊いてきた。

「特にないわよ。ミズキがヒビキとまた新鮮な血ちくを出しに逝くだけ
よ」

私がそう言つと、スバルは納得したように、

「何だ。そうなのか」

と言つた。

「俺も行くのかよ!？」

「ヒビキ、違うわよ。あんたも逝くの」

「漢字が違う気がするんだけど、タクミ姐さん」

「気のせいよ」

私はニコツとヒビキに微笑んだ。すると、血の気がサアッと引いたようにヒビキの顔が青ざめた。

分かる子には分かるのね。

「それじゃ、逝つてらっしやーい」

私はまた気絶したミズキとミズキを運ぶヒビキを見送った。

新事実(その2)と災難再び?(後書き)

次回に続く

豹変 ？（前書き）

今回は、軽ーくニナコとタクミがKYですWWW

そして再びミコトが……。

豹変？

かと思った。

「黙って聞いてりゃあ、なんだ？折角手当てしてやったつーのに、また出血しに行くのか？ヒビキ」

これはミコトの声。だけど、口調が変わっている。それを聞いたヒビキの足が止まった。

どういうこと!？

「彼^{あそこ}処^{そこ}までするのはなあ、結構時間がかかるんだよ。分かってっかあ!？」

そして、ミコトは走り出そうとした。それをスバルは止めるために羽交い締めをする。

「なにすッ」

「いっぺん落ち着けシエロ、じゃねエミコト!」

「ねえ、ミズキいない?逃げられたんだけど」

そこにニナコが帰ってきた。

「あらニナコ。ミズキを探しに来たの?ミズキならそこよ」

私は、ミズキとヒビキがいる場所を指差した。

「ついでにヒビキもお願いできる?」

「え、ヒビキも殺^やれるんですか!？」

ニナコは笑顔で、とても嬉しそうに私に訊いてきた。

「ッ…くそッ!」

「だから落ち着けシ　　うわっ!？」

ダンッ

この音に、全員が驚いた。

スバルは床に叩きつけられていた。ミコトがスバルさんの腕を振りほどいたようだ。ミコトは走り出した。

「大丈夫スバルさん!？」

レオナがスバルを心配して駆け寄る。私も後から駆け寄る。

「だ、大丈夫だ…イテテ…」

私はスバルの足にそっと触れた。少し腫れているようだ。

スバル……受け身をしようとして足を付いたのね。……捻挫して
る。

「ミコト！アンタ実の姉をよく床に叩きつけられたわね!？」
スバルさん

レオナは、ミコトにそう叫んだ。とその直後、我にかえったようにレオナははつとした。

ミコトはレオナの叫び(?)を聞いて止まった。そして、

「うるせエ！黙ってる!!！」

とレオナに怒鳴った。

完全に口調が変わっている。

「シエ ミコトツ！ そんな言い方しなくても…イテツ」

スバルはミコトに言った。立ち上がるうとしていたけれど、足を捻挫して立ち上がれなかった。

「無理しないで!」

レオナはスバルに言った。

「姉貴。そこで黙ってる」

ミコトは、さっき怒鳴っていた声ではなく、静かな声でスバルさんに言い放った。

一体、どういう事なの？

「スバル……ミコトのこの態度は一体？」

スバルは眉間に皺を寄せ、視線を下に落とし、

「……言えない。教えられない」と言った。

何か、事情でもあるのかしら？

ヒビキは立ち止まったままだし、ニナコはただ呆然と立ち尽くしている。

「とにかく、どんな事情があるのか知らないけど、部屋に行きまし

よ。もう借りてるんですよ」

「あ、ああ」

「レオナ、スバルは私が部屋に連れて行くから、ここはお願いね」

「は、はい」

後でジョーイさんに冷湿布貰って来ないと。

私はそう思って、スバルをおんぶしてスバルとレオナが泊まる部屋へ連れて行った。

豹変？（後書き）

次回に続く

説教？ 推理？（前書き）

今回は二ナコsideです（、、）

何か話の内容が黒くなってきてる気がする……（^^^；

説教？ 推理？

.....ニナコside

「レオナ、スバルは私が部屋に連れて行くから、ここはお願いね」
タクミさんはそこまで言うと、スバルさんをおぶった。

「は、はい」

レオナが返事した。

そして、タクミさんとスバルさんは部屋がある方へ歩いていった。

「ミ……ミコト……くん……？ どうしたの……？」

私は今の状況を理解出来ない。レオナも理解出来ずにいるようだ。
「説教に決まってるんだろ」

そう言いながらミコトくんは、私を鋭く睨み付けた。正直言うと、とても怖い。

「まず、質問だ。ヒビキが大量に出血をしていたのは、ニナコのせい
いか？」

「う、うん。そうだけど。でも、それが何か説教に関係あるの？」

私はどきまぎしながらミコトくんの質問に答えた。

「関係あるから聞いているんだ。」

あと、ミスキをこんなにもボロボロにしたのもお前か？」

……ミコトくんがミスキを呼び捨て？

「当たり前だよ。私以外に誰がいるの？」

質問が二回連続来て、少し疲れた。それに、ミコトくんの意図が
掴めない。

「あれくらいしたって罪にはならないじゃん。」

「というか、さつきから質問が続いてるよ？説教じゃなかったの？」
私はミコトくんの意図を掴もうと、少しおちよくった口調で言うてみた。

ミコトくんはため息をついてから、

「ハア…だから説教だって…言っただろ！！」
と私に怒鳴った。

「!？」

いきなり過ぎて、私はビックリした。

「み、ミコト……。そんなに怒鳴らなくてもいいんじゃないのか…
…？」

「駄目だ。ちゃんと説教しないと、またお前が死にかける事になる。
それに、ミズキも、だ」

「ミズキ……。兄さんも？」

ヒビキがそう言った直後、ミズキの意識が戻った。

「イテテ……。ん……。？みんなどうかしたのか？……シエ　いや、
ミコト……。お前……」

ミズキの口調が突然変わった。

「一体何なの!？」

レオナを見てみた。ミズキの口調が男らしくなった事に凄く驚いていた。ヒビキは分かっているのか、少し眉間に皺を寄せて、ミコトくとミズキの話聞いていた。

「……身長伸びたか？」

ミズキ以外の全員がずっこけそうになる。

「そこ!？訊くところそこ!？」

「当たり前だろ。成長はするんだからよ。
後、黙ってる。口出しするな。いいな？」

「なん」

「い・い・な!？」

ミコトくんは、ミズキに言った。

「ここんとこスバルさんにそっくり……。流石姉弟きょうだい。」

「わ、分かった」

ミズキは、承知するしかなかったようで、そう言った。

「さ〜とッ。お説教しますか」

そう言いながらミコトくんは私がいる方向に向き直した。

何かテンションがガラツと変わった……。

「あ、そう言えば二ナコ。俺、勘違いしてたわ」

ゆっくりと私の方へ歩き出すミコトくん。

「な、何？」

私は突然近づいて来るミコトくんに少しビククリしながら、少し後退りした。

「俺さア、ヒビキの大量出血、ヒビキアイツがなんかいたらんこっちゃしたんかと思ってた。やらかしたにしてもこりゃやり過ぎだな、とくらいにしか考えていなかった。

でも、さっき確信した!『ヒビキも殺れる』のかと、嬉しそうに訊いていた。それに『あれくらいしたって罪にはならない』とも言った。二ナコは、ただヒビキをボッコボコにしたかったただけだと言うことだ。そうだろ!？」

探偵が推理するような口調でミコトくんが訊いてきた。

「う、うん……。まあ、そういうところかな?でもミコトくん。ヒビキはあれぐらいの出血で死んだりしないから」

「それってけな貶してんのか？」

ヒビキが訊いてきた。

「いや、一応褒めてる。人間並じゃないって事」

私はヒビキにニコツと笑って言った。ヒビキは、何故か呆れていた。

「……お前、ヒビキのこと嫌いか？」

ミコトくんは静かな声で私に質問してきた。

「え？ 嫌いに決まってんじゃない」

少しだけね だからといって好きって訳じゃないから。

「酷エ！」

ヒビキはその言葉をまんま受け取ったようで、涙目でそう言った。

「じゃあ、ヒビキが普通の人間でも同じことをするんだな」

「！？ ミ、ミコトくん、私、そこまではしないよ！！」

私はミコトくんの言葉にビックリした。

私そこまで鬼畜じゃないよ！

「間接技あれが出来るのは、幼馴染みヒビキとミスキじゃないと出来ないの！」

説教？ 推理？（後書き）

次回に続く

スバルの手当(前書き)

今回は、タクミsideデス

アンドちよつと長いつすよ

スバルの手当

- - - タクミ side

私はスバルを部屋に運んだ後、ジョーイさんに冷湿布を貰いに行
った。

私は入口付近を見た。

まだ二ナコたちミコトと話しているのね。

少し距離が遠い為か、少ししか会話が聞こえなかった。

まあいいわ。

「あの、ジョーイさん」

「はい。何でしょう？」

そう言つてにこやかに返事するジョーイさん。

「冷湿布を頂けますか？」

「冷湿布ね。少し待つてもらえる？」

「あ、はい」

ジョーイさんはそう言つてカウンターの下に潜り込んだ。

数分後、ジョーイさんが出てきた。

「はい、お待ちとおさま。冷湿布よ」

ジョーイさんはそう言つて冷湿布をくれた。

「ありがとうございます！」

「誰か、捻挫でもしたの？」

突然聞かれた。

「え？ああ。友達が」

「なら、少し診みに行つてもいいかしら？」

「え？」

部屋の中

「ただいまスバル」

「お帰り、タクミ」

「ジョーイさん、こちらがスバルです。今左足を捻挫しているみたいです」

「分かったわ。その貴女、足の具合を診させてもらってもいいかしら？」

「え？あ、ああ」

ジョーイさんはしゃがんで、座っているスバルの足の具合を診た。「んー。本当に捻挫してるわね。松葉杖があれば何とか旅は出来るでしょうけど、片足となれば無理ね。」

とりあえず、今は冷湿布しかないから、貼っておきましょう。貼ったら松葉杖とサポーターを持ってくるから、そこで待っててね」
そう言ってジョーイさんは部屋から出て行った。

「わざわざジョーイさんと呼ばなくてもよかったのに」

「ジョーイさんが『診させてもらえる？』って訊いてきたんだからしょうがないじゃない。かすり傷とかならともかく、捻挫してるんだから、ジョーイさんだって診ないわけにはいかないでしょ？」

私は向かいの二段ベッドの一段目に腰かけながら言った。

「まあ、そうだが……」

「……旅がしにくくなるわね」

「……だな。ところでタクミ。これからどうするんだ？」

「どづつて？」

「二ナコ達と旅を続けるのか？」

「いや、そうしないわ。二ナコ達がジムに挑戦した後、私とミズキは二ナコ達と別れて、ワタルさんとレッドさんに会いに行くの。それから、ホウエンに帰って、いつも通りに仕事をしていくつもりよ」

「そうか」

「スバルはどうするの？レオナとこれからも旅するの？」

「アタシは……」

ガチャ

扉が開いて、ジョーイさんが入ってきた。

「お待たせ。松葉杖探すのに手こずってて」

ジョーイさんはそう笑って言いながら、松葉杖を机に立て掛けた。

「それじゃあ、サポーターを付けるわね」

ジョーイさんはそう言って、スバルの足にサポーターを付け始めた。

数分後

「はい、終わりよ。くれぐれも段差とか、出っ張ったところには注意してね」

「はい」

スバルの足には、包帯が巻かれていた。

「それでは失礼しました」

ジョーイさんはそう言って、部屋から出て行った。

「はあ〜あ。こんな風にしなくてもよかったのになー」

スバルはベッドに倒れ込みながら言った。

「こんなの大袈裟過ぎる」

スバルは、口を尖らせ、捻挫した足に巻かれた包帯をを上下に動かしながら言った。

「捻挫なんだし、仕方ないじゃない。……それにしても、珍しいわよね。スバルが怪我するだなんて」

「そうか？」

スバルが起き上がって言った。

「そうじゃない。だって、最後に怪我したのかなり前でしょ」

「そこまで前でもないさ。（怪我したの）一昨日だし。しかもそんな時も捻挫だったし」

「一昨日!? 捻挫!? 嘘でしょ!？」

「嘘じゃないんだよな〜これがっ!」

スバルは少しおどけてみせた。

信じられない……。

「でも捻挫したあとなんて何処にもなんてないわよ!？」

「だって治ったし。普通に1日で治るじゃん」

「普通じゃないわよ! スバルが凄いだけよ!！」

私がそう言うと、スバルは少し驚いたようだった。

1日で治るとか、人間じゃないわ。人間の域を越してるもの。

「まあ、いくらスバルが凄いからといって、この捻挫がすぐ治るとは分からないから、暫く様子を見ましよう」

私はスバルにそう言った。

「何でだ？」

「ミコトに投げられたからに決まってるでしょ？」

「いくらシエ じゃなかったミコトでも手加減ぐらいはしてくれてるさ。……多分だが」

「ところで、さっきからずっと気になってたんだけど」

「何だ？」

「何でミコトを他の名前で呼ぼうとするの？」

「だから、教えられないつつってんだろ？」

「おかしいじゃない。私達、友達でしょ？今までだって交流はあったじゃない」

私はスバルに言った。

スバルは罰が悪そうに、

「だから、教えられないないんだ。いつかは教えるかも知れないが

……。友達だからこそ、教えられないことだってある」

そう言った。

スバルの手当（後書き）

次回に続く

“ あいつ ” ……？ (前書き)

何カ月投稿してない？自分？

…………… ああ、二ヶ月以上デスカ…。

今回は久しぶり(？)のヒビキsideです。

出てきたんだ。

「crazy。つまり、狂つてると言うことだ。今の二ナコは確実に狂っている。意味は自分で考える。」

よしミズキ、お前等の部屋は何号室だ？」

おいミコト。自分で意味を言ってるぞ？そうじゃないとしたら、趣旨が違うのか？

「喋っていいのか？」

「あまり喋るな。で、何号室だ？」

今更だが、何でミズキ兄さん、喋ったらいけないんだ？

「確か、4628号室だったな」

ミズキ兄さんは、俺と泊まる部屋の番号を言った。

「んじゃあ行くか。あと、ヒビキもついてこい」

ミコトは、ミズキをおぶりながら言った。

シュールな光景だな。

俺はそう思いながらミコトに返事した。

「あ、嗚呼」

俺はミズキ兄さんをおぶって俺達が泊まる部屋へ向かったミコトの後ろについて行った。

ミコトはミズキ兄さんをおぶって4628号室内に入った。

おそらく、俺とミズキ兄さんが泊まると思われる2人部屋。

「そこに座れ」

「嗚呼」

ミコトはミズキ兄さんをベッドに座らせる。

「手当てするぞ」

「なあ、こんなに長居して大丈夫なのか？」

ミコトがそう言っただけで直ぐにミスキ兄さんがミコトにそう訊いた。

どういう事だ？

「……それもそうなんだよな。でも、ミコトにやらせると酷いんだよ。もしかしたら死ぬかもしれない。実際に死んだやつはいないけどな」

「そこまで酷いのか？（……）」

「嗚呼。あいつは雑だからな」

“あいつ”とは誰の事が分からぬまま、俺はミスキ兄さんが座っているベッドの向かいにあるベッドに座った。

「嗚呼。あいつは雑だからな」

ミコトが少し呆れたように言った。

だから“あいつ”って誰だよ！？

「ま、良かったなミスキ。こんくらいですんで。ヒビキみたいな大量出血じゃなくてよ」

ミコトは少しおどけながら言った。

「それは流石に酷いだろ！？」

俺はベッドから立ち上がってミコトに言い返した。

俺かて、あんなに出血するとは思ってなかったんだよ！

「しゃーない気がしなくもないけどな。ヒビキは運が悪かったんだろ」

「それってどっちだ？」

「どうでもいいだろ。ほれ、治療終了だ。本当にヒビキより軽傷だったぞ」

ミコトは治療を終えた。

「そう言えば、ミコトって多重人格者だろ？ 今みたいな人格になったときはなつたときで違う名前みたいなんがあるんじゃないのか？ それ教えてくれよ」

「……………知りたいか？」

そう言ったミコトの顔には少し躊躇ためらいがあったように感じた。多分……………、気のせいだが。

「当たり前じゃないか」

「一回しか言わないぞ。」

“failure”だ」

ミコトの口から出た言葉は、俺に衝撃を与えた。

「failure……………失…敗？」

「おっ、ヒビキは分かるんだな。関心関心。…って違うか？」

ミコトはまたおどけて言った。

「そこはおどけるところじゃないだろ……………」

俺だけでなく、ミズキ兄さんもミコトに突っ込んだ。

「いいじゃんか〜暗いのは嫌いだしよ〜」

ミコトはそう言った。

そんな考えも分からなくはないが……………。

「説教する奴が言うか、普通」

少し呆れる。

“あいつ”……？（後書き）

ヒビキのくせに長い間尺を取りやがって……！

ヒビキ「お前がそうしたんだろ……」

次回の二ナコズ・ストーリーは？

二ナコ「次回予告なんてサービス、ありませんよ？」

うん、酷え。

二ナコ「何が酷いもんですか。毎回次回予告なんてしてこなかったじゃないですか」

まあ、いいや。

では、次回に続く

孵化したポケモン(前書き)

タクミ「さて、作者。はじめる前に読者にお詫び下さい」

……はい。5ヶ月も放り投げていてすみませんでした……。

ニナコ「私達、どんだけ暇だったと思っているんですか？アキラくんなんか、全然出番無いじゃないですか」

……はい(´・`・?) 頑張って執筆させていただきましたm(´ー`)m

ミズキ「まずは中間テストが終わってからだね」

ミズキ、君が仏に見えるよ……！

タクミ「ミズキ！作者を甘やかさない！」

ミズキ「う、うめん……」

ニナコ「では、始まります」

孵化したポケモン

- - - ニナコside

レオナと私は、すっかり取り残されていた。

「レオナ、私って狂ってるのかな？」

私はミコトくんに言われた、『くれないじー』と言う何処の言葉か分からない意味をレオナに訊いた。答えは勿論、

「分かんない」

「なんか予想通り（^^；）」

「ニナコが分からないなら、勿論アタシも分かんない。でも、これから分かっていけばいいじゃん？」

レオナは私の方を向いて、笑って言った。

「…確かにそうだね」

私が少し苦笑いして言った直後、レオナのバッグが突然動き出した。

「なっ、何!？」

レオナは慌ててバッグの中を見た。

一体何が……？

「ごめんニナコ、アタシ、一回ジョーイさんのところに行ってくる！　ここで待ってて!!」

レオナは私にそう言って、カウンターの方へバッグを大事そうに抱えて走って行った。

それから私は絶賛レオナを搜索中。何故か、なかなか見つからない。ポケモンセンター内をくまなく捜してはいるんだけど、やっぱり見つからない。

「何処に行ったのかなあ？ レオナ」

ホントに何処に行ったのやら。……もしかしたら、外かな？

そう思い、私はポケモンセンターを出て、ポケモンセンターの裏に行つて見ることにした。

* * *

「あ、いたいた。もう、レオナ。こんなところで何を……」
私は唾然とした。レオナが見たこともないポケモンを座ったまま抱いているのだ。

「このポケモンは……一体……？」
まあ、正体がイマイチ分からないので、図鑑で調べて見ることにした。

【マナファイ かいゆうポケモン
どんな ポケモンとでも こころを
かよいあわせる ことが できる
ふしぎな のうりよくを もっている。】

「そーなんだあ。変わったポケモンもいるもんなんだなあ。レオナ
つてば、このポケモン一体いつ何処で捕まえたのつて……レオ
ナ？」

レオナは何の反応を示さない。

「ねえレオナってば」

私はレオナの肩を持って揺さぶった。やっぱり反応がない。その時、レオナの顔が目が、一瞬見えた。

「レ……………オナ……………」

目に、光が宿っていなかった。所謂、ハイライトがなかったのだ。「マナ！」

レオナが抱いていたポケモンが何か言い出した。でも何を言っているのか全然分からない。しかも、このポケモン、どことなく嬉しそうだ。

変なポケモン……………。主人が意識を失っているのに、どうしてこんなに嬉しそうにしているの……………？

とにかく、私はレオナをポケモンセンターの壁に座らせた。それから開いていた目を閉じさせた。

いつ目が覚めるだろうか……………。

そんな事を思っていると、レオナが目を開いた。

「レオナ、大丈夫？ 病気じゃない？」

「えっ？」

「やっとレオナが喋った！」

レオナは驚いて私の方を見る。

「やっとって、どういうこと？」

「レオナ、さっきまで何も喋らなかったじゃん！ 病気かと思って心配したんだよ！？」

とにかく、目が覚めて良かった。

「心配かけてごめん、二ナコ」

「いいよ。ところでレオナ、このポケモンは一体いつ何処で捕まえたの？」

「え？」

「なんでそれが知りたいの？」

レオナに訊かれた。

『なんで』……か。『なんで』だろうね？

「……気になったからだよ、レオナ」

私はレオナにそう答えた。

「そのポケモンはこの地方のポケモンじゃないからね。つい、気になっ」

「何でそんな事が分かるの？」

「図鑑ナンバーがないんだもの。だって、全国図鑑手に入れてないんだから、分かる筈もないんだけど。それに、そのポケモンはホウエン地方のポケモンだよ？ タクミさんが前に“マナフィ”というポケモンが居るって言っていた。まさかこんなところで会えるとは思わなかったけどね」

「へえ……知らなかった」

「知らなかったの！？ マナフィの持ち主なのに！？」

私はレオナの言葉に驚いた。

「まあね。だって今日初めて見たし、初めて知ったから」

「今日……！？？」

私は驚かざるえなかった。

でも、よくよく考えてみれば、知らないのが当たり前。他の地方のポケモンだなんて知ってる私がおかしいのかな？

「ところで、レオナ。そのマナフィの卵、どこで手に入れたの？」

「……えっ？ 何でわかったの……！？？」

レオナが驚きながら言った。

「うーん、何となくかな。この辺にマナフィが住み着いているわけないし、まずマナフィは幻と言われているし、滅多に人前に姿を表さない筈だから」

私は少し考えて、そう答えた。

「で、どこで手に入れたの？」

私がそう言うと、

「……海に落ちたとき。陸地が見えないと思ったたらどんどん深いところまで行ってたみたいで。気付けばかなり深いところまで辿り着いてた。そこで見つけたの」

と、レオナは話した。

海に、落ちた？ 引き寄せられたんじゃない？ そもそもなんでマナフィの卵がこんな所に？ 流れ着いた？ マナフィは稀少価値が高いポケモン。ポケモンハンターに捕まってしまうは一環の終わり。そのマナフィを持っているレオナも危なくなる……。どうしよう！ どうすれば安全だろう？

「……コ？ ちょっと、ニナコってば！」

「えっ？ な、何!？」

「大丈夫？ 何か考え事？ 顔色がコロコロ変わってて、ちょっと心配したんだけど」

「あ、ごめっ！」

いけない。つい考え込んでしまった。

でもレオナがマナフィに選ばれたと言うことは……【蒼海の王子】
に選ばれたと言うことは……。あ、何か凄くヤバイ予感がする……
! どうしよっ、どうしよっ!

「ちょっとニナコ!？」

「ぎゃむっ!?!」

「あ、ごめん」

あー、変な声出ちゃった。どっから出てきたー、私の変な声。
「まあとりあえず、ポケモンセンターの中に戻ろう。もしタクミさんやミコトがロビーに戻ってきたときにアタシたちが居なかったら心配するでしょ?」

レオナがそう言った。

「あ〜……うん。そうだね」

ちよつと心もとないけど、賛成するしかないのかなあ。

その時、私達を見ていた者に、私とレオナは気づかなかった。

「やっと見つけたよ、【蒼海の王子】……!」

ポケモンセンター

ポケモンセンターに入ると、みんなフロアに戻って来ていた。何か、痛々しい姿のミズキと松葉杖を持ったスバルさんがいるけど、そこは敢えて気にしない

「あら、2人とも何処に行ってたのよ」

タクミさんが私とレオナにそう言った。

「あら? レオナ、そのポケモンは……」

タクミさんにそう言われて、レオナは『しまった!』という顔をしていた。

孵化したポケモン（後書き）

タクミ「さて、次回はもっと早めに投稿しなさい。そうねえ……あ
ちらさんと同じように投稿すればなんとかなるわよ」

そうさせていただきますm（——）m

ではでは、また次回！

驚異……？（前書き）

はい、遅くなりました！。

って誰も見てるはずがない。

いろいろめんどくなっただんで、どうぞ、次のページに逝ってください。

漢字が違っ？気のせいですよ（^^）

驚異……？

ロビーに帰って来た途端、タクミさんにレオナのマナフィの存在を知られてしまい、今（ミコトくんを除き）私達はスバルさんとレオナが今日泊まる部屋に集まる事になってしまった。

タクミさんがロビーで「マナフィをどこで手に入れたか」をしつこくレオナに訊いていた事もあり、四人部屋のこの部屋に来ることになってしまったのだ。

「部屋へやならいいんでしょう？ ……さて、何度も訊くけど、そのマナフィは、どこで手に入れたの？」

タクミさんは何故だか苛立っている様子。多分、レオナが遠回しに事を言ったりしていたからだと思うけど。タクミさん、短気なんだもんなあ……。

部屋には猿でも分かるぐらい、緊迫した空気が張り詰めている。タクミさんは部屋の窓側で腕を組み、真剣な眼差しでレオナを見据みすえていた。ミズキはタクミさんの近くにある、椅子に座ってタクミさんのピリピリした感情を敏感に感じるようで、タクミさんをチラ見ながら少しビクビクしていた。私はと言うと、ベッドに座り、レオナに、ポケモンセンターに入る前に、マナフィを戻しておいた方がいいと言っべきだったと後悔していた。あと、誰かの存在を忘れていたような……。

「……あの、どこから話せばいいんですか？」

私が座っているベッドの左隣に座るレオナが、恐る恐るタクミさんに訊く。

やっぱり分かるよね、タクミさんがピリピリしてるの。

「マナフィを手に入れるきっかけからよ。どこで、どのように手に

入れたかを全て細かくね」

一触即発……って感じ。

私はそう思った。

「何故それを知りたいんですか？」

レオナは、私が質問して、出した答えと同じ答えをタクミに言った。

「誰かから奪ったりしてないか確かめるためよ、レオナ。貴女がそんなことをするとは思わないんだけど……一応ね」

【蒼海の王子】……。タクミさん達、ホウエン地方の人達にとって、切っても切り離せない存在……。それが居なくなるとしたら、多分、ホウエン地方の人達は皆、どうしていいか分からなくなるのだろう。ふとそう思った。多分、タクミさんとしては、【蒼海の王子】、マナフィを守るうとしている。あくまで、私なりの推測なんだけど。多分それでタクミさんはピリピリしてるんだろうなあ。レオナ、分かってる？ ……この様子を見る限り、全然分かってないみたい。

「それで、どこで手に入れたの？ いい加減話して
タクミさんは痺れを切らしたようだ。

レオナがあまりにも回りくどい事を言うから……。
「……分かりました。誰にも話さないでくださいよ」 そう言って、レオナは私に話したように、タクミさん……いや、その場にいるみんなに、簡潔に話し始めた。

「実は昨日、ヨシノシテイの海に落ちたんです。陸地に向かって泳いでると思っていたらどんどん深いところまで行ってしまっ。そして、かなり深いところにマナフィの卵が落ちていました。アタシはその卵を拾って、今までリュックの中に入れてたんです。

そしたら今日、マナフィの卵は孵りました」

「そう。……嘘ついてなんか、いないわよね？」

「当たり前ですよ！」

タクミさんがあまりにもしつこすぎると思ったのか、レオナはムキになり、立ち上がってタクミさんに言った。

レオナがムキになって言った言葉を最後に、部屋は静かになった。その後、レオナが一瞬「しまった」という顔をしたのを、私は見逃さなかった。

その後、レオナは再び私の隣に座り、考える事に耽^{ふけ}っていた。その時のその場は、沈黙が部屋中を支配していた。

沈黙が何分か続いた気がした。そして、その沈黙を破ったのは、さつきまで何も口出ししなかった、タクミさんの右隣の椅子に座っていたスバルさんのある一言だった。

「……この状況でこんなこと言いにくいんだけどさ、ギブス外^{これ}していいか？」

スバルさんは、良いづらそうに片手を耳の辺りまで挙げ、もう片手をギブスに指して言った。

その一言を聞き、全員、驚愕した顔でスバルさんを一斉に見る。

「駄目よ！ まだ治ってないでしょ！？」

タクミさんが、何を言ってるのでも言いたそうに（既に言っているのも同然だが）、そう言った。

「タクミ、捻挫ならとつこの間に治^まってる。大体、捻挫くらいなら15分で治るだろ？」

そう言いながらスバルさんはギブスを外そうとする。

まるで常識はずれである。本当に、この人は人間なのだろうか？

「スバル。本当に治った？」

ミスキが心配そうに訊ねる。

「勿論だ。そうじゃなかったらこんなこと言い出さないだろ。いつも思うんだ、あたしにギブス使うだけ無駄だな、ってさ」

そう言いながらも、慎重にギブスを外しながらミスキの問いに答えるスバルさん。

まさに驚異……だね。

タクミさんは未だに信じられないようだ。

「ん？ 5人ともそんな顔してどうした？ 病気か？」

スバルさんはギブスを外し終わると、顔をあげてみんなの顔を見、キョトンとした顔でそう言った。スバルさんが見たのは、全員が啞然としてスバルさんを見ている顔だと思う。多分ね。

「あ、そうだ。今までの話とは全く関係ないんだけど、レオナとニコでバトルしてみないか？」

スバルさんがいきなりそう言ってきた。

「……………ば、ばとつ、何？ バトル？ バトルって言った？ 私とレオナが？」

「ルールは1vs1。どちらかのポケモンが戦闘不能になった時点で試合終了。これでいいじゃん」

スバルさんは、パツパツとルールを決め、満足そうにニカツと笑い、手を組んで、頭に回し、足を男の子っぽく広げ、完全なるリラックス状態でそう言った。

「ちよ、ちよつと待ってよ！ なんでバトルすることになったの！？？」

私は思わず立ち上がり、スバルさんに訊く。

「だつて見てみたいし、2人のバトル。それに、レベルアップには丁度いいだろ？ 多分二人はジム戦に挑戦するつもりじゃないの？」

スバルさんはさつきまで捻挫していた方の足を軽く叩きながら答え、タクミさんは「スバル……アンタって……」とでも言いたそうな顔をして見ていた。

思い返してみれば、【マダツボミの塔】でレベルアップするつもりが、戦う前にレオナとスバルさんに会って、レベル上げすら出来

なかったし、それから、整理が出来ない程、何やら色々あって……。
思えば、私、この町に着いてから、キヤタピーとしか喋ってないし、そのキヤタピーと言うと、【マダツボミの塔】に入る前にポールに仕舞ってしまった。それ以来、全然ポケモンに触れてない！
これは、良いチャンスだと思った。レオナの実力レベルを見てみたいと思っていたところだったし、今日一日出してあげられなかったポケモン達との絆をもっと深められる……。

私は小さく、

「ちよつとしてみたい…かも」

そう言ってみた。まるで迷いや不安でもあるかのように。

「そうか!？」

スバルさんはバツと立ち上がり、純粋な子供のように顔を輝かせて私を見る。

無類のバトル好きって感じだね…… (^^; ;

「あとはレオナの意味だな。したいのかしたくないのか、どっちだ？」

スバルさんは目を輝かせたまま、レオナの方を見る。

「アタシは……、バトルをしな、バトルは明日よ」

レオナの言葉をタクミさんが遮った。それまで爛々としていたスバルさんの目が、不満の色に変わった。

「何でレオナの返事を遮るんだ、タクミ」

スバルさんが不満そうに言った。

「あのねえ、スバル。よく考えてご覧なさいよ。今日一日色んな事があって疲れているだろうに、いきなり二人のバトルが見たいからってさせようとするなんて……。それに今はもう夕方よ？ この町は夜が来るのが早いし、みんな草くたひ臥れてるだろうし、バトルは明日で良いじゃない。バトルの前に、コンディションを整えた方がずっと良いわよ」

「けどさあ……」

スバルさんが口を尖らせて言うものの、タクミさんは、

「けどじゃない」

と、仁王立ちして言った。

何だか、子供を叱っているお母さんみたいな画^えになってる……。

ぐぎゅ〜

誰かの腹の虫が鳴いた。

暫しの沈黙。一瞬だけ空気が固まった気がした。

誰かの腹の虫の正体は、

「……………すまん」

ヒビキ（の腹の虫）だった。

……………って、

「ヒビキ居たの!？」

「居たよ! ずっと居た!!」

「ヒビキ空気だね!？」

と、私の隣にいたレオナがそう言った。

「空気じゃねえよ! ちよっと存在が薄いだけだ!」

「結局空気じゃん!」

私とレオナはハモった。

その発言にやっとヒビキの存在に気づいたのが、タクミさんが、

「あら、ヒビキ居たの」

と言った。多分わざとじゃないよ、多分……。

「ヒビキ、居たんだな」

と、スバルさんにまで言われてしまった。

そう言われた途端、ヒビキの姿が視界から消え、いつの間にかやら部屋の隅っこで体育座りで座り、“の”の字を書いていた。負の才

ーラが駄々漏れである。

「お、落ち込むなー、ヒビキー」

少々焦り気味に、ミズキがヒビキを宥^{なだ}めていた。

「ミズキ兄さんは、気づいていたよな……？ そうだよな……？」「ヒビキは、泣きそうな（既に泣いているかもしれない）声で言った。

「ご、ごめん……。僕も、今気づいたんだ……」

「うわぁっ!!」

その言葉を聞くと、ヒビキはそう言って、本気と書いてガチで泣き出した。

「もう駄目だ……。俺もう生きていけない……。駄目だ……。今なら死ねる。確実に死ねる……。主に寂しさと悲しさで死ねる……。ブツブツ」

ヒビキはキャラ崩壊。今にも「ママー!」と叫びそうだ。けど、

ヒビキは絶対そうは言わない。逆に、
「あんのクソ親父めがー!」

と、泣きながらそう叫んだ。どっちかと言えば、憎しみが含まれてる感じ。

虚しくも、その叫び声はこの部屋中に、いや、このポケモンセンター中に響き渡る事となった。

* * *

数分したら、ヒビキが脱け殻になりました

「何だか全体的に白くなってるよ、ヒビキ」

「……」

返事がない。ただの屍のようだ。……ツツコミがないい！
つまんない！

「ヒビキー！ リアルに口から魂が抜け掛かってるー！」

ミズキの声はヒビキには届かない。だって、気絶してるし。聞こえねえ、聞こえねえ。

「さて、ヒビキの腹の虫も鳴いていた事もあり、みんなお腹空いてるでしょ？ 食べに行かない？」

タクミさんが一部始終を見終えたところで、話を切り出した。

「そうだなー。確か、このポケモンセンターはレストランがあった筈だ」

そう言いながらスバルさんが立ち上がる。

「それに、ミズキがヒビキの相手してるし、ヒビキの意識が戻りゃ、こっちにも来るだろうし」

と、スバルさんは更に伸びをしながら欠伸をし、そう言った。

「じゃあ、それで良いわね？」

「「はい」」

と、私とレオナ。

「ああ。分かったよ」

と、ヒビキを何故かお姫様だっこしてタクミさんに返事するミズキ。

多分、自分達の泊まる返事の^{ミズキとヒビキ}ベッドに移す予定なんだろうな……。今からカメラで撮つとこつ。

私は、デジタルカメラをポケットから取り出し、

ピピッ

と、撮ってやった。

「一体何を撮ったの!？」

と、ミスキ。

何をと言われたので、正直に答えた。

「何って……。ミスキとヒビキ」

「撮って何が楽しいの!？」

「分からない事は気にしちや駄目サ」

「二ナコ、後で見せてね」

と、レオナ。

「うん。良いよ」

「よし、そんじゃ行こうぜ」

と、タイミングを見計らってスバルさんはそう言った。

まあ、そう言う事で、私達は一端部屋を出た。

それからヒビキをおぶったミスキは、私達とまた会うことを約束し、自分達の泊まる部屋に向かって私達と反対方向に歩いて行った。

驚異……？（後書き）

Q・次はいつでしょう？

A・分からない

ニナコ「さつさと執筆してください」

……「この子どつじにかならないかな……」。

新たな登場人物（前書き）

はい、久しぶりです。

ちまちま更新してます。ニナコズ・ストーリー。

早くコラボ終わらせないと、あちらさんが……（汗）

とりあえずどうぞ

新たな登場人物

レストランに到着した。今この場に居るのは4人。座るのにちょうどいい人数。

「ここに座りましょ」

タクミさんが空いている席を指した。私達は頷き、その席に座った。

席順は、

スバルさん レオナ

机

タクミさん 私

という感じ。

「さて、何を頼もうかしら」

早速メニュー表を見るタクミさん。

「あつ、あたしサラダ！」

スバルさんはメニュー表も見ずに言う。

「サラダはサラダでもいろいろあるよ」

私はもう1冊のメニュー表を取り、見ながら言った。

例えば、高いのとか高いのとか。

「そんなら1番安いやつな」

安いやつ、と言っても、みんなほぼ同じ値段だった事は言わない事にした。

「スバル金欠？」

タクミさんが不機嫌そうな顔でスバルさんに訊く。

「いや」

金欠じゃないならなんだろう？

「技マシンとか買う金に回すためになるべく節約してるだけだ。でもこの地方の技マシン不便だよな。使い捨てだし。でもイッシュの技マシンはこっちより高いんだよなあ」

何ですと？

「文句言わないの。しょうがないでしょ。だいたいイッシュの技マシンは進歩しすぎなのよ。それに、何回でも使える技マシンなんだから高いに決まってるじゃない」

「何度も使える技マシンですと！？ しかも高いだなんて……。この地方で一番高いので5000円以上するから、それ以上なんだね……。」

「うっせーな！！ ガミガミまじめくさりやがって、学級委員長かつつーんだよお前はよー！！」

スバルさん、何かそれ違う。

「なっ……………！！？」

タクミさんは反応しないで！

「スバル、あんた女でしょ！ そんな喋り方しないの！！ どのチンピラよ！？」

ち、チンピラで……。レオナは何か「同感」って感じで頷いてるし……。あ、その後耳塞いだ。まあ……。五月蠅いのはもう慣れてるし、私は大丈夫だなあ……。(^ ^)；

今、周りを見渡してみたんだけど……。視線がこっちに集中してるよ。(汗)

「誰がチンピラだコラ！！」

「あんた以外ないでしょ！！ 大体、あんたは子どもすぎるのよ

「！！ 2年前とまったく変わってないじゃない！！」

「それはタクミも同じじゃねーか！！ 昔っからまじめで！！」

「まじめは長所よ！！」

「凄^{すさまじ}い討論です……。取っ組み合いにならなきゃいいんだけどな……」

「（^^；レオナは何かイライラしてきてるし……」

しかしその喧嘩は突然終わった。

ゴンッ

「~~~~~っ！！」

スバルさんは痛そうに頭を抱えている。スバルさんの頭の上には、ひとつの拳があった。どうやらこれが音の正体みたい。

「ミズキが“他の4人はレストランに行ってる”って言うから来てみれば……なにやってんだよ姉貴、タクミ」

その拳は、ミコトのもだった。

「なっ、なにするのよ!？」

タクミさんは涙目になってミコトに文句を言う。タクミさんも殴られたんだろう。後頭部辺りを擦っている。

「何故だろうか。一瞬レオナの思っている事が分かつちゃった。」「ヒビキを殴れば良いのに」っていうのが分かつちゃった！

「まわりに迷惑かけているから殴りました」。さあてお2人さん、お説教タイムなんで外に行きましようかねえ？」

私たちは一気に凍りついた。冷や汗が一気に吹き出てくる。ミ、ミミミミミコトくん?! 目が笑ってないよ!? スバルさんは固まってたらだと冷や汗をかいているし、タクミさんは顔が青ざめている。

「思っている間に、ミコトはスバルさんとタクミさんの襟を掴み、外まで連行つれゆき行った。」

御愁傷様、と言つべきかなあ……………（^^；

数十分後

数十分経つたけど、タクミさんとスバルさんが一向に帰ってくる気配がないので仕方なくレオナと夕食を食べていた。（ちなみに、私はマルゲリータで、レオナはボリユームたつぷりのステーキだよ。）

すると、

「あー、居た居た。やあ、二人とも」

上の服が緑、下の服が茶色という樹木スタイルのミスキが後ろに誰かを連れてこっちへやって来た。

「……………あれ？ タクミと、スバルは？」

「えーと。ミコトに連れられて、今外で鮮血くつきを貰っているんです」
苦しい言い訳をしたなあ、レオナ……………

「そ、そっか……………」

ミスキすんごく苦笑いしてる……………。

「……………あれ？ ミズキ、後ろの人は誰？ ヒビキは？」

「こちらは、鈴見マコトすずみさんだよ。シンオウ地方チャンピオンの秘書をしているんだ」

ミスキは肩まであるふんわりした翠がかった黒髪の少女を前に出した。

「……………どうも」

その少女は無愛想な挨拶をした。わざとじゃないみたいだけどね……………。

またチャンピオン繋がりかあ……………。いい加減飽きたかも。

「ちなみに、マコトさんは15歳だ」

「……結構美人さんだなあ……」

と、レオナがボソツと呟いた。確かにそうかも……。

「で、ヒビキは？ ミズキ」

「部屋だよ」

「何で？」

「疲れたから寝るって」

疲れたから寝るって……ヒビキ放心状態になってただけじゃん。

「ところでミズキさん、一体何処でマコトさんに会ったんですか？」

とレオナ。あ、それ私も気になってた！。

「いや、ついさつきそこで」

チャンピオンの秘書がそこに居ていいのか！？

「大丈夫だ。ラキアは一人でも生きていける」

いきなり喋ったよ！ 声可愛いのに口調が何だか残念！ ってか

ラキアって誰?! しかも心読まれたー！

「まあ、そんな訳と一緒に食べて良い？」

「え、嫌」

あ、思わず即答してしまった。ってかどんな訳？

「そんな訳ってどんな訳なんですかミズキさん」

とステーキを食べながらレオナが言った。

「（気にしなくて）いいじゃん」

「……です。知りたいです。気になります」

「レオナ、途中から（思ってる事が）声に出てるよ」

「え」

大丈夫かな、この子^{レオナ}。

「まあ、でも空いてる席はスバルさんとタクミさんの席ですから教えてもらえようともえまいと無理です」

ときつぱりとレオナが言った。

「戻ってくる気配はないけどね」

多分だけど。

「そうでもないぞ」

マコトさんはそう言うと、レストラン入口を指して言った。

その方向を見ると、ぐったりしてこちらに歩いてくるスバルさんとタクミさんがいた。

「戻ってきたみたいだね」

殴られたりしたのかな。　ちよつとワクワク（＾o＾）o

「大丈夫？」

「これが大丈夫に見えるかレオナ？」

「いいえとしか答えようがないわね」

あれ？　アザとか傷が全然ない……？　なのにげっそりしてる…

…。殴られたりされたわけじゃないのかな。

「全く……ミコトは説教始めると長いのね……足がしびれたわ」

タクミさんがポロリと漏らしたその一言で何があったのかは大体予想できた。

あー、うん。あんな感じが……。私だったら……嫌だなあ……。

痺れ過ぎて人格がおかしくなっちゃうよ。

「御愁傷様です」

レオナも想像出来たのか、苦笑しながら言った。

キャラ崩壊注意報発令しまった(前書き)

こんちくわー、亀更新ネコです。

ちゃんと小説書けるようになりたいな……)・・(

キャラ崩壊注意報発令しまった

「あー、腹減ったー」

とスバルさんが伸びをしながら言った。

「そうね……。って、あ、ミズキ。アンタ居たんだ」

「うん、気づいて。僕悲しいよ……」

「いつもの事でしょ」

とタクミさんが言うと、ミズキが

「酷い！」

と両手で顔を覆い、しゃがんで言った。

「落ち込むな、ミズキ。私はさつきから全然気づかれていないのだから」

と、マコトさんがミズキの肩を叩いて言った。

「あ、マコトさん。すいません、ミズキが居たんで気づきませんでした」

「以外と黒いね、タクミさん……」。

「では、ミズキ。私達は窓側で食べようか。私も夕飯がまだなのだ」

「あ、そうだったんですか」

ミズキは両手を顔から離し、そう言った。本当は泣いてなかったみたい。

「じゃあ、行きましょうか」

と、ミズキは立ち上がり、マコトさんを先導した。しかも何か微妙にカッコつけてるし。

「ミズキのヤツ、何かカッコつけてんだ？」

と、不思議そうにスバルさんが言った。

「さあ？」

とステーキを頬張るレオナ。

数分後

「あー！ いっぱい喰ったー。腹一杯っ」

と満足そうにスバルさんはロビーのソファで寛くわんぎながら言った。夕飯を食べ終えた私達は、最小限の明かりがついたポケセンのロビーで寛いでいた。

「そうねー」

と、これまた満足そうにタクミが言った。

そういえば、スバルさんサラダだけでいいとか何とか言ってたけど、結局レオナとおんなじステーキ食べてたなあ……。節約するんじゃないかったのかな。

それにしても、

「ミズキとマコトさん、遅いね。レオナ」

「だね。何でこんなに遅いんだろ」

「もしかしたら、ミズキがマコトさんに告白してたりとか！」

「あー、分かる気がするー！ なんかお似合いだもんね！」

「でも、あんなんじゃ駄目だと思うわ」

私とレオナが話している間から、タクミさんが話に加わってきた。

「タクミさん！」

二人で驚いて、ハモっちゃった。

「何ですか？」

とレオナ。

「腰抜けがあんな綺麗なマコトさんとくっついてご覧なさい。絶対アイツ尻に敷かれるわよ」

……分かる気がする。

「あ、噂をすれば……」

とレオナの視線の先には、ミズキがマコトさんの身体を支えながらやって来る姿があった。

「マコトさんが、よ、酔ってる……」

とタクミさんが呟いた。

ホントに酔ってる……。だって顔真っ赤だもん。

「ミズキ、あんた何を飲ませたのよ？」

と、酔ったマコトさんをミズキから受け取ったタクミさんは、ミズキに聞いた。

「僕は何も飲ませてないよ！ 僕は飲ませまいとしたけど、マコトさんが勝手に酒飲み始めたんだよ！ しかも、」

「チャンピオンって大変なんだぞ。朝から晩までお仕事するんだから。ミズキもラキアみたいに立派な奴になるんだよ。あ、でも変態にはなっちゃだめだぞ。」

「チャンピオンの仕事について延々と話続け、キャラ変わってんだよー！」

何て事だ……。完全にキャラ崩壊だよ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2312k/>

ニナコズ・ストーリー

2011年12月26日09時51分発行